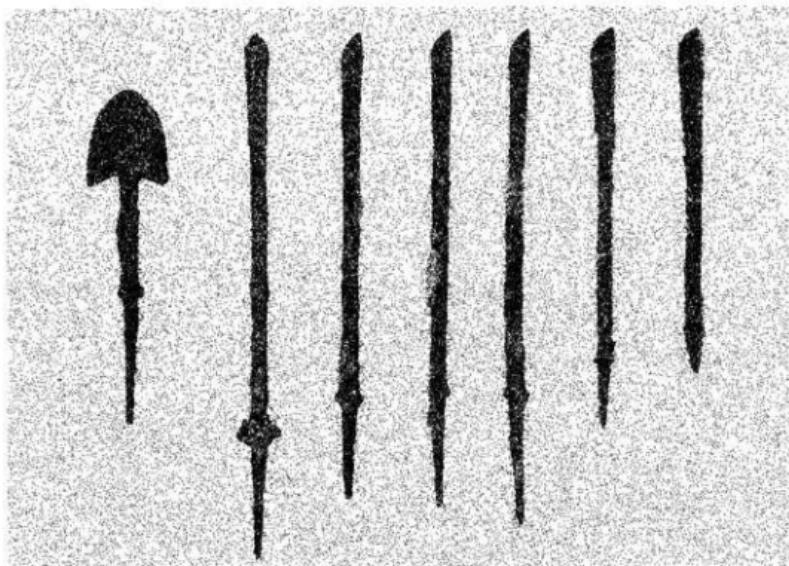


研究紀要

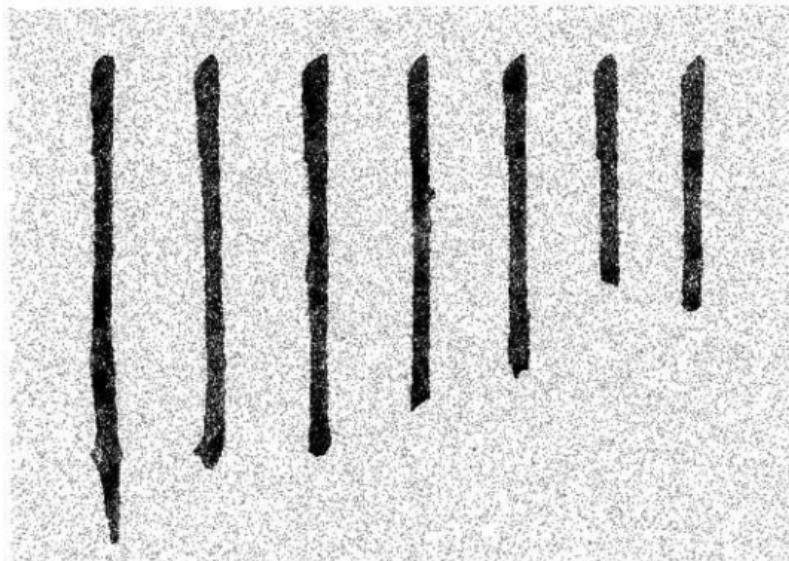
第 10 号

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

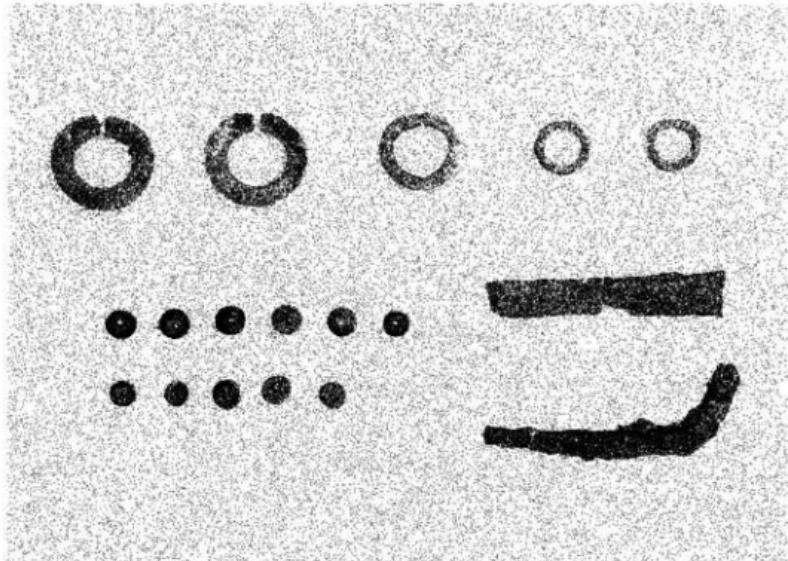


1 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (1)

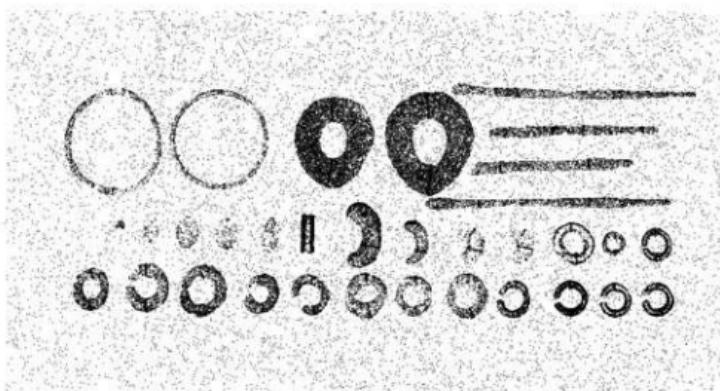


2 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (2)

図版2



3 毛呂山町川角15号墳 装身具・鉄製品



4 毛呂山町大類古墳群出土遺物

目 次

序

〈論文〉

- 子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討 金子 直行……(1)
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—
- 羽状縄文系土器の紋様構成（点描） 2 黒坂 権二……(45)
- 遮光器系土偶についての考察 浜野美代子……(83)
- 方形周溝墓出土の木製品 野中 仁 福田 聖……(113)
- 吉ヶ谷式集落の展開 石坂 俊郎……(159)
- 埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相 山本 靖……(181)
- 東国における終末期古墳の基礎的研究（2）
田中広明 大谷 徹……(203)
- 腰帶の一考察 田中広明……(245)
- 北武藏の古代通路について 井上尚明……(257)

羽状縄文系土器の文様構成(点描)一2

黒 坂 穎 二

要約 本論は、羽状縄文系土器を題材とし、公理的な方法にならいつ文様構成をひもとき、その性格を論じようとする試みである。

羽状縄文系は東調路系や円筒系、そして北筒系にいたる、基層に共通する類縁系の一員である。これららの文様構成は、縄の圧痕があらわす方向線を発想の源泉とし、追加成形施文法という土器づくりの技術面に制約された範囲でそれぞれの実態が捻出される。

羽状縄文系の各地で開始されたいくつかの原始型は、視覚的な置換と心理的な変換により數かずの変質をとげる。広域で同調するその方向性と手順は、省略されることはあるこそそれ、逆転することはない。そのなかで、基層にふれる手法や構成はゆきびまり、保全にまさる単相へとたちかえる。

一方、構成にこめられた精と粗の別は、時どきに応じた相対であつかわれ、個体系列として確立することはない。だが、精には地方間の伝達や類縁系としての連携を象徴する構成が、対して、粗は、地方の在地を潜在的に繼承する構成があげられる。

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. なぜ羽状縄文系なのか | 10. 類縁系 |
| 2. 追加成形施文法 | 11. 類縁系の成立 |
| 3. 構成の起源 | 12. 精と粗 |
| 4. 置換と変換 | 13. 置換と変換・移封と補完 |
| 5. 極性の統一 | 14. ゆきびまり |
| 6. 羽状縄文の背景 | 15. 単相の構造力 |
| 7. 極性階梯の省略・未到達 | 16. 類縁系の終末 |
| 8. 地域改編と移封 | 17. ふたつの類縁系 |
| 9. 内的飽和 | 18. おわりに |

以上(1) 当事業団『研究紀要』第6号

参考文献・資料出典文献 以上(2) 本編

10. 類 縁 系

南関東で羽状縄文系土器を出土する遺跡では、まれに器壁うすく縄文を欠く異質の土器がともなう。より西方の東海・中部などで好まれた「木島式」や「北白川下層式」である。たとえば、関東と東海を見くらべると、おなじような時期に製作し、使用されたうえ、出土地の分布が接するにもかかわらず、技法や表現が根本からことなることに気づく。その「ちがい」は明らかで、小片であれども、これらを羽状縄文系のなかから抽出するのは、初見の一般人でもたやすい。

逆に、時おなじくする北方に目を転すれば、それほどの「ちがい」を見いだすことはできない。たとえば、北海道央でおなじような時期につくられた土器は、分布が接すことなく、海峡が地理的なへだたりを助長するにもかかわらず、共通する特徴が多い。出土地を伏せたうえで、こちらの

破片と南関東の羽状縄文系を識別するのは、専門の人々でもなかなか判定がつかない。

このような類似の多寡は、羽状縄文系とおなじ時期だけではなく、先後の他系にもあてはまる。そして、北方ほどに似かよった個体群が好まれた時間幅がひろがる。仮に、北海道東の中間に展開した北筒系の破片を、関東前期の羽状縄文系のまとまりに少數まぜても、これに気づく人はまれだろう。両者にいたる時と距離は「ちがいの量子」をさらに際だたせる。

なぜ、このような差があるのだろう。

われわれがいま「羽状縄文系」とか「燃糸文系」などと表現している土器のまとまりは、個体群的視野から「土器群」で、手法群的に「様式」という用語で単位化されている。縄文時代に成立した「様式」あるいは「土器群」のそれぞれは、自然と同格に見なされることが多く、ともすれば対立するあつかいとなっている。その各間に近い違いを認めた表現や記載はまれで、これにもとづく単位となれば、大方がうすうす認めながらも、存在しないのが実状である。

しかし、羽状縄文系の周辺にかぎらず、このような例はいくつもある。たとえば、中期後半に東北から瀬戸内までを凌駕した加曾利E系と咲畠・醍醐系、加えて大木系などの文様構成は、T形や連弧の文様流動線構成を基調とするなど、通ずる点が多い。反面、隣接して分布する北筒系や阿高系とは明らかにちがいがある。また、縄文を欠く器面の屈曲部を目安として横位線をめぐらす複数の構成は、西日本を舞台として縁帶文系後葉から凸帶文系までの基軸として維持された。

この共通は、単なる偶然ではない。土器づくりの発想が似かようからこそあらわれる。したがって、羽状縄文系と北筒系、そして、東海の系とのあいだに横たわる本質の距離をおなじにあつかうわけにはいかない。この現象を認め、あつかうためには、「様式」や「土器群」と把握される各系を、さらにまとめる枠組が必要となる。ここでは、いくつかの系で特徴的な形質や性質が類似し、そこに縁故の関係が見いだせると、「類縁系」の語でそれらを束ねることにしよう。

類縁系のまとまりをおおう共通は、文様構成にそなわる本質の共有をも意味している。起源が通ずればこそ、構成体系の継承や移入が円滑となり、結果としてあらわれた実像は類似に秀でたものとなる。逆に、起源がことなればこそ、「関山式」と「木島式」は、時をおなじくして好まれ、しかも分布が接するにもかかわらず、似つかぬ実態があらわれることとなる。

羽状縄文系が属する類縁系には、ほかに東鈎路系、東北東北早中期後半の縄文施文系、「中野式」や「宮本式」をはじめとする北海道前中期における複数の未命名縄文施文系、円筒下層・上層系、そして「余市式」をふくめた北筒系がある。これらは文様構成を維持する発想の基盤とともにし、その方法と製作の技術、はては、変化の手法についてもかよいあう、近い間がらなのである。

前編で示した羽状縄文系の諸事象は、抽象化するほどに、これらの系にも通じる特質があらわれる。すなわち、追加成形施文法の制約のなかで、縄の圧痕があらわす方向線を文様構成の発想の源泉とし、置換と変換などにより具体的な変化を経験する。そして、発想の根底に横たわる基層にふれる構成は、無自覚な変化の指針をうしない、断絶していく。

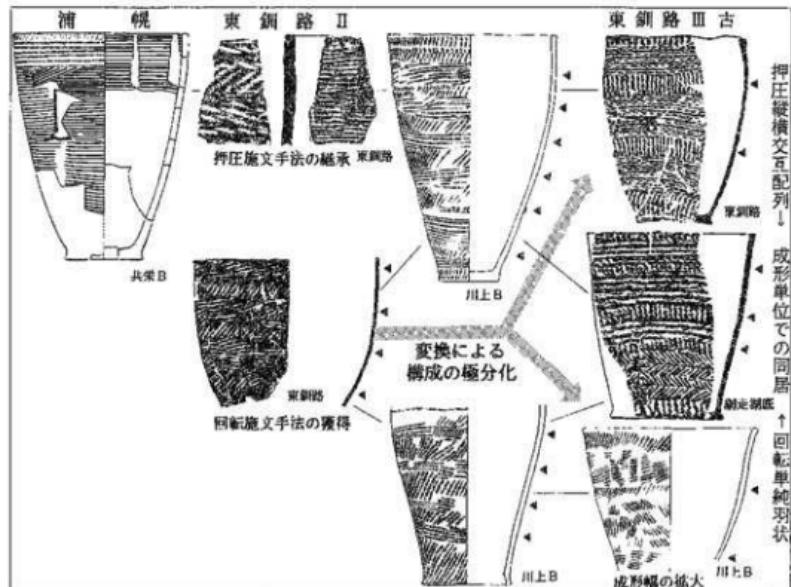
以下、前編に加えたいいくつかの現象をもとに、各系のあいだにみられる共通をさぐり、羽状縄文系の血筋や性格を考えてみよう。

11. 類縁系の成立

羽状繩文系がよりどころとした構成の基層は、独自にはぐくまれたものではない。時空ともにその先後で連絡がある。前編の「構成の起源」で述べたとおり、羽状繩文系が保持する発想の源泉、すなわち繩の方向線に依存する文様構成は、北東北の「早船田5類」を介し、東鈎路系にまでさかのぼることができる。そして、さらにこれを繰りかえせば、「東鈎路II式」にたどりつく。

同式は、斜方向と横走する繩文、あるいは撚糸文が上下で交互に繰りかえし施文される構成が基本である。一見したところ、それは羽状繩文構成に類似する。しかし、施文帯のあいだにあらわれる横位線が不明瞭で、羽状への意図が確立しているとはいがたい。これはなにも端麗な条方向の変化を求めたのではない。成形技術と施文との関わりのなかで、結果として残された構成なのである（第13図）。

同式の成形は、ごく短い「下の積みあげで、いったん作業が終結し、施文がおこなわれる。その幅は、せいぜい4～5cm程度で、成形単位と繩による横位施文の一回分の幅がおおかた対応する。成形単位にもとづいてまず施文されるのは、斜行する繩文である。そして、これをおおうように印されている横走繩文は、文様を構成するというよりは、成形接合部の違和感など、みための不足をとりつくろうために加えられているのである。



第13図 東鈎路系の基本構成二態

おなじような成形施文の工程は、北東北の「赤御堂式」でも明らかにされている。これらは本論の冒頭で示した追加成形施文法と類似する。しかし、そのものではない。同法は複数の施文工程をおりこんだブロック単位の成形法である。

一方、「東鉄路II式」の製作作者たちが、はからずもあらわした条方向の変化は、ななめがちな横位置のあいまいさから、二種類の方向線対立の発想をうながす。すなわち、斜と横が器面にしめる角度を等価とした羽状、そして双方が対立する縦と横の上下交互配列である。

ふたつの対立をすんで認知し、それを使いわけることにより、構成の単調を脱したのが「東鉄路III式」である。そして、効率の適性にかなうよう、縦と横の方向線対立は主として押圧で、また羽状は回転によるという、構成と施文手法の対応関係をも成立させていく。構成を抜本的にかえる意識の変換と、それともう繩から縦への置換があらたな展開の間口をひろげた。

このなかで、特別な責を付託されたのが縦位押圧である。II式では、成形幅に応じた主たる施文帯が斜、接合部上の従的な追加施文帯は横の方向線でまかれていた。だが、III式では、見ための方向線と主従の対応が逆転し、接合部の粘土圧着には、横位ではなく、縦位押圧がもっぱらあてられることとなる。この関係は、成形粘土に通ずる感觉から、底部外周の粘土追加部に波及し、のちに個体上位の単純な貼付文を誘発した。

ともあれ、III式の成立当初は、押圧がこまかに縦横を繰りかえすなど、それまでの構成に忠実であった。しかし、接合部と縦位押圧の対応が深まるにつれ、横位押圧部の主施文帯化がすすむ。また、等価の方向線ゆえに接合部とのかかわりを断った羽状構成も、これに同調する。その結果、主施文帯における施文の効率化がはかられ、上下で複数の施文工程が同居できるよう、一回あたりの成形幅が拡大する。

「東鉄路II式」の構成は、成形幅と施文工程が直接にからみあうため、大きな技術的制約を負っていた。ところが、「東鉄路III式」では、文様構成と成形法をやや離して認識しただけで、視覚的な単調から開放された。ここにいたり、類縦系の多くに共通し、文様構成に多大な影響をおよぼしつづけた追加成形施文法が確立した。

これにともない、繩の方向線を文様構成の源泉とする発想法も普及する。

繩の圧痕が土器面に印される方法は、大きく押圧と回転の二種がある。このうち、押圧繩文の手法は、東鉄路系の発達以前、「浦幌式」を最終とする平底系の一部ですでにもちいられている。しかし、方向線の変化から構成の変革をめざす動きはない。それ以前に位置づけられている平底系の文様構成からすれば、むしろ沈線などを素材とした置換行為とみなせる部分もある。

押圧手法は、器形や内面の条痕調整などで「浦幌式」と共通する「東鉄路II式」でもわずかながら確認されている。これらは、口縁直下への集中施文など、平底系からの繼承関係を憶測できる。反面、回転手法はさきの「東鉄路II式」から他にさかのほることができない。つまり、繩の圧痕を表現できる押圧と回転の双方が出そろった最初がII式なのである。そして、この方向線を利用して変化をとげ、文様構成としての体裁を確立したのが「東鉄路III式」になる。したがって、表面的な発想法の確立はIII式にあてるのが妥当かもしれない。

しかし、ここで求めるべき類縦系に共通する基層の起源は、文様構成の移りかわりがあってはじ

めて識別できる。おぼつかないながらも、II式は接合部に縄があらわす条方向の変化を求める、結果的にはあるが、方向線の対立や組みあわせを意識させ、つぎの階梯にいたる心理的な変換を醸成していった。その点を加味すれば、手法としての起源はIII式に、また、素材としての起源はII式にあるとも表現できるだろう。

羽状繩文系をふくむ類縁系に維持・継承される体系は、東鉄路系の成立とともにとぎすまされ、確立した。その後の東鉄路系の変化は、押圧施文系列での縦位と横位や、押圧と回転の対立や融合など、両手法が複雑に混淆しつつ、類縁系が到達できる前編で説明した変化の手法や動態のほぼすべてを経験した。以降の各系は、それぞれに直接の連絡がないにもかかわらず、繩の仕痕から発した構成の消長に際し、そのなかのいづれかを選択するような推移をたどる。

12. 精 と 粗

羽状繩文系が属する類縁系は東鉄路系を端緒として開始された。追加成形施文法とともに普遍化した構成は、「東鉄路II式」がはからずもあらわした縄の方向線を、縦横のとりあわせと、羽状のいづれに見なすかによってわかれた。それぞれは、押圧と回転という別の施文手法でまかわれるようになる。

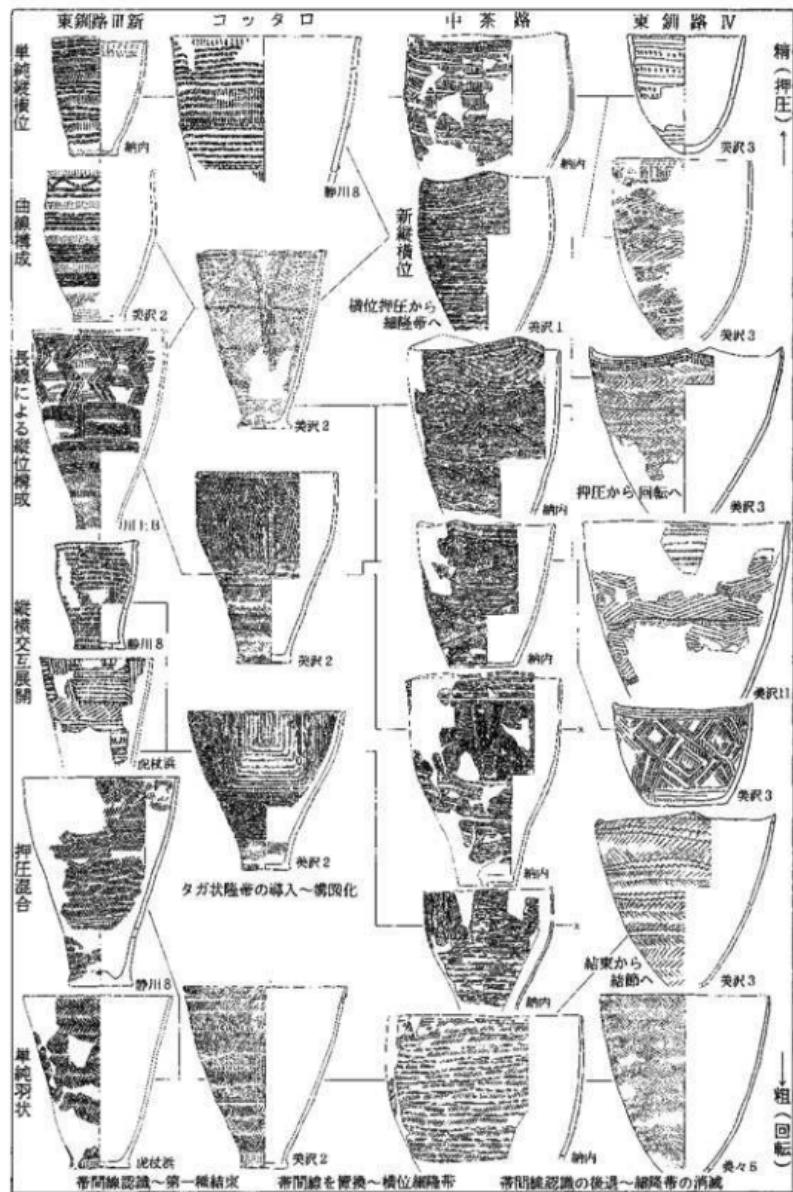
この二者は、視覚・装飾的な効果にちがいがある。押圧は、線としての表現に近く、施文の可変性に富む。対して、回転は、押捺で印される面の単位でしかやり繕りがきかない。現代の感覚からすれば、押圧系は精系の施文要素として、回転系が粗系としてあつかわれているはずである。はたして、のちの東鉄路系がたどった変化は、その当否を示すとともに、類縁系に共通する精粗の性格と関係をも如実にものがたる（第14図）。

「東鉄路II式」で確立した追加成形施文法は、前代の方法に起因する構成選択の制約をといた。ものはや、縦横や羽状のみを繰りかえす必要はない。その結果、縦横の交互配置と単純羽状を両極とするはざまで構成の分岐がすむことになる。

たとえば、発生時の押圧手法の構成では、短い線表現の縦と、長い線表現をになう横とが平等に施文帯を区分されていた。だが、成形幅の拡大は接合回数をへらし、接合部とともにある縦位は施文帯をうばわれる。これに対し、主たる施文帯としてのおもみが増した横位帯では、施文の許容範囲がひろがり、変化を求めて曲線構成があらわれる。さらに、施文帯をたがえていたはずの縦位が曲線のあい間に充填され、そのうえ、直横位線と交互に配置されるなど、縦横の方向線と施文帯の対応がうしなわれる。

主施文帯にはいりこんだ縦位は、そもそも接合部と密着している。これは、底部外周の粘土追加にも施されることでも類推できる。つまり、前節で述べたとおり、本来は不安定な粘土接合部の圧着をもくろみ縦位押圧があてられたのである。ところが、この関係を逆手にとり、個体上位に充填されていた縦位押圧をよりどころとして、単純な貼付文が取りいれられる。

器面を隆起させる発想は、つづく「コッタロ式」に至り、欠かせない要素としてあつかわれる。成形接合部では、縦位押圧を呼び水に、前代の粘土貼付が隆帯となってタガ状にめぐらされる。当然のことながら、隆帯上には縦位押圧が加えられている。しかし、のちには各種の押圧や刺突に置



第14図 東鉄路系の構成変化

換されるなど、隆帯発生の経緯は風化してしまう。このことは、隆帯が指定された施文法の制約から解かれる方向にあることを意味している。

独歩をはじめとするタガ状隆帯は、羽状縄文構成で醸成されつつあった意識の変換に乘じ、施文位置の拡大をはかる。前編で述べたように、羽状がつくりだす方向線には、矢羽のほかに、単方向ではあらわれにくい施文帶間線がある。「コッタロ式」で帶間線の認識が高じたことは、これを強調する結束羽状縄文の登用からも察することができる。隆帯は、この横位線を置換するかたちで接合部や縦位押圧への依存から脱却し、回転施文との融合をはたした。

隆帯の転移は胴部の帶間線だけにとどまらない。横位の押圧が主体となる施文帯にも、これを置換したり、圧痕の間を隆起させるかたちではいりこむ。ここにいたっての隆帯は、みずからのお出をわすれ、横位押圧にかわる長い方向線としてあてられている。そして、胴部でつちかわれたとりあわせにならい、回転手法である羽状縄文までもが隆帯化したかつての押圧線の地文として組みこまれる。

もちろん、それまでに、個体内で押圧と回転が同居したものもある。だが、それらは、成形帯を単位とするか、接合部にかぎっての混合であった。ここで生じた変化とは、押圧を起源とする要素と回転施文がともにあり、単位を成す方法である。そもそも発想を異にしていた両者のへだたりは、徐々にうめられていく。

さらに、「中茶路式」では、押圧系列内の縦位と横位、押圧と回転の対立があいまいとなる。押圧帶での横位線を置きかえた隆帯は、多くがこれに取ってかわる。隆帯と、横位線の補助であった縦位押圧の、縦横位を基本とする構成が完成する。そして、羽状構成で進んだ施文帯の幅狭化に呼応して隆帯の間隔がせばまる。その結果、視覚効果の必然から、隆帯が細化するとともに、単独の押圧加筋が激減する。

この縦横位構成は、「東訓路III式」以来、構成選択の一極にあった縦横対立とは異質のものである。ところが、からうじて継続する原始系列をよそに、みための類似から押圧系列の根幹としてあつかわれる。これらも、はじめは羽状構成の帶間線認識を反映し、縄文施文のうちに細隆帯を加えていた。しかし、幅狭化にともなう施文効率の限界から、一部では手順をくつがえし、あげくは、縦位の方向線を燃糸文、つまり回転系の施文で一気にまかなく個体すらあらわれる。

細隆帯の施文法にみられる変化は、「コッタロ式」でつちかわれた帶間線認識が後退しあげたことも示している。ちなみに、羽状縄文が地文となる個体では、この認識を体现し、隆帯とは両立しなかったはずの結束部の回転痕が細隆帯のあいだで共存するようになる。そして、横位線をあらわしくい結節部の回転痕に置換されてしまう。

押圧施文系列の劣勢は、これを置換するために広義の附加条手法を多用する「東訓路IV式」でさうに助長される。細隆帯は、帶間線認識の衰退により、存在の基盤がうばわれる。結果としてこの押圧構成も、たとえば、波状が燃糸文による横帯内羽状構成へと変化するなど、横位施文の伝統にそぐわぬ一部の構成をのぞき、回転手法に置換されていく。また、これにともない、単純羽状構成の系列も附加条法へと原体を持ちかえた。

押圧が回転にかわり、それも羽状構成全盛のなかで、わずかに残るここでの横位線列は、いくつ

かのを類型を生みつつも、細かな縦位押圧と、その置換要素が結果的に横方向に展開する構成に収束されていく。それは、幅狭化をきわめた中茶路的な縦横位構成から細隆帯を取りさったものである。やがては、この横位線列も回転の燃糸文に置換されてしまう。そして、最終的には、回転施文系だけが東訓路系の伝統をそのままに継承する構成要素となる。

このように、東訓路系は押圧と回転系構成の対立と融合のなかで推移した。それぞれが精と粗の相対的な別としてあてられたのは、施文の位置や趣向への思いいれなどで明らかだろう。それは、一時的でなく、変化のすべてを通して維持された普遍的な現象である。さきに、押圧手法は「浦幌式」から受けついだことにふれた。また、回転は、直接の母体となる「東訓路II式」から他に遷及できない現状がつづくかぎり、東訓路系が独自に獲得した手法であると判断せざるをえない。つまり、東訓路系の立場からみれば、精が外来で粗が在来ということになる。

東訓路系は、はじめは押圧、なかでも横位が主たる施文帶を獲得するなど、優位にあった。ところが、精である押圧による縦横位の対立を背景に、隆帯が生みだされた。さらに、その隆帯は、粗である回転が胴部で変換された帶間線認識により加工された。そして、縦位押圧による成立の経緯をわすれ、繩文構成の幅狭化を機に、むしろ横位押圧にとってかわる。

こうして、押圧と回転、縦と横にこめられた相対的な対立のかきねは構成をささえる意識の変節にともない次つぎと取りはらわれ、はては、帶間線認識の衰退とともに、在来を保ちつつも、等閑なあつかいを受けていた粗が外来の精を凌駕するにいたるのである。

だが、はたして、東訓路系における精粗や、外在來の想定は妥当なのだろうか。そこには、さしたる意図がこめられていなかつたのかもしれない。しかし、おなじようなことが、羽状繩文系をふくむ類縦系内の他の例でもあてはまる。たとえば、精系がそなえる域間連絡の象徴性は、東訓路系と歩調をともにした北東北で典型的にあらわれる。

前節では「東訓路II式」と「赤御堂式」の成形法が共通することにふれた。現在のところ、單方向繩文がもっぱらであった同式は、時とともに多方向の変化が加えられる説明されている。それは、こまかに繰りかえしではなく、相当幅の横斜位が中心である。つまり、変化した成形法の接合単位に呼応するものとわかる。変化のうちに安定したのは、追加成形施文法である。

そして、「早稻田5類」や、その直前とされる「赤御堂式」の一部では、附加条法をもちいた綾杉状の繩文が器面をうめる。これは、「東訓路III式」の押圧系列における三本組紐や類似の圧痕の視覚効果を回転手法で模したものである。だが、その変化の過程では構成の変換を喚起するにはいたらない。「コッタロ式」の押圧繩文系が成する鋭角羽状を取りいれて、はじめて「早稻田5類」の典型的な構成と繩文が確立した。手本となった要素は、東訓路系における精と粗のなかで、前者のみである。

また、「表館X群」は、口縁部文様帶を設け、燃糸側面圧痕や沈線文で波状を基本とした横位の構図をえがく。地文は、羽状繩文もあるが、むしろ、燃糸文や縦走繩文など、縦位の方向線を浮きたせせるものが多い。ふたつの方向線指向を加味すると、それが、「中茶路式」で隆盛した新縦横位構成と波状亞型を指南とし、その細隆帯と縦位押圧、あるいは、燃糸文との組みあわせを模倣したのはあきらかである。細隆帯と縦位押圧の組みあわせにあたる波状線は、はじめは燃糸側面圧痕で、

のちに置換されて沈線文と化した。地文に多い撚糸文や縦走繩文は、細縫帶間の縦位押圧をまねたものである。

さらに、前編で示したとおり、「長七谷地田群」で主体となる口縁部構成は、東鈎路系につづく「綱文土器」の構成にならっている。最終燃りRに統一された横走繩文は、そのままの手法で受容され、「早稻田5類」以来、北東北が独自にはぐくみ完成させた帶間羽状構成をはさみ、底部にも成形単位を目安として配置される。

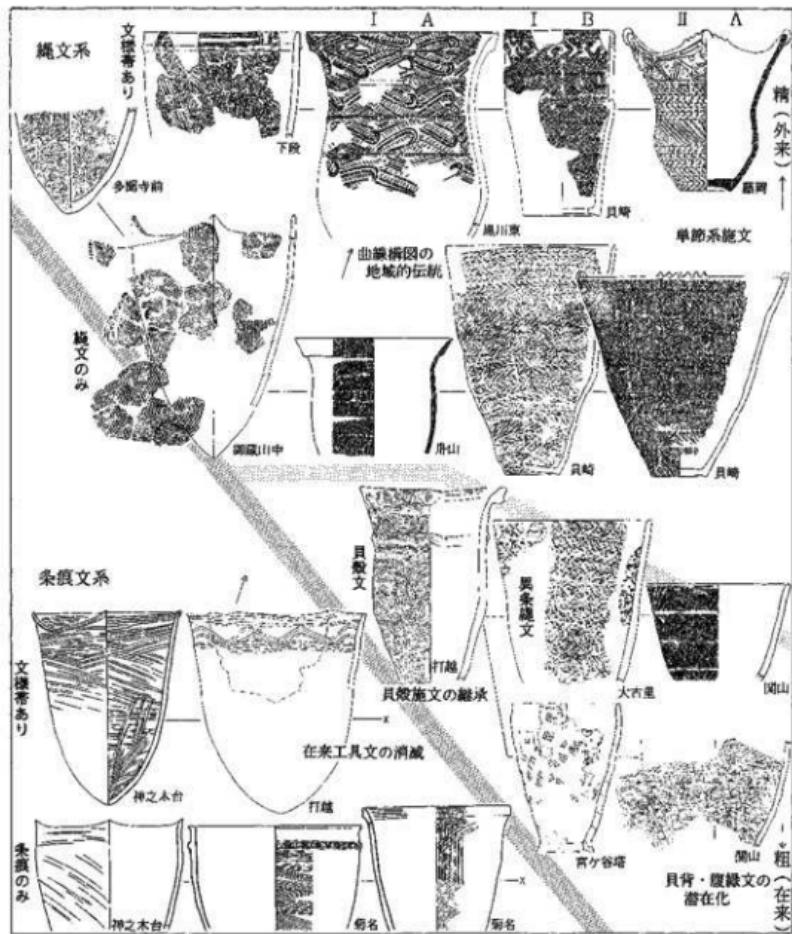
このように、北東北では幾度かにわたり東鈎路系と継承系の要素と構成を取りいれた。対象は、精系である押圧がもっぱらで、粗系の帶間羽状構成をもちいていない。また、その受けいれに際して、全体を模した構成が主体化しなかった。成形単位や口縁部文様帶という横位区分を目安とした「移封」にとどまることが、発想を盗みつつも同化を避けた北東北構成の独自性を象徴し、これらが在外来の検証の素材として値することを証明しているのである。

ちなみに、おなじ類縁系にありながら、東鈎路系や継承系と、羽状繩文系では、羽状構成をめぐる精粗が捻転してしまう。前編では、東鈎路系の精系構成を取りいれた北東北の「早稻田5類」以来、独自に幾種かの羽状をはぐくみ、「長七谷地田群」をはじめとする羽状繩文系の帶間羽状構成へといたることを示した。複数の変換をへてもなお、外來を起源とするかぎり、羽状構成は精系としてあつかわれなければならない。なればこそ、おなじ構成でありながら、両系でのあつかいが逆転してしまったのである。一見矛盾する関係も、くわしい経緯をひもとけば、精系による地方間の伝達と、北東北早期繩文施文系の一時留保がもたらした皮相であったことが判明する。

ところで、「表館X群」や「長七谷地田群」では、口縁部文様帶の有無のほかに、精粗の区分をただちに判別しにくい。わずかに撚糸文の全面施文や、非羽状の粗雑な施文が粗系としての別を彷彿させるものの、繩文原体の差や、施文手法などで大きな対立を見いだせない。これは、精系の伸長とともに、粗系のになうべき在地の主張がこちらに移譲されたためである。東鈎路系における構成の拡散は、粗系が精系の構成を駆逐する過程であった。逆に、前期初頭では広域にわたり、粗系の潜在化がすすむ。だが、関東では、事前にまったくことなる体系を保持していただけに、これに長期を要することになる。反面、潜在化の過程がもっともたどりやすい（第15図）。

関東羽状繩文系の直接の源は、北東北の繩文施文構成の南下にともない成立した早期末に位置づけられる一群にある。それは、斜転移施文による銳角羽状を構成し、直線的な撚糸側面圧痕を口縁部にめぐらす。施文原体はR Lしがもっぱらで、「早稻田5類」の銳角羽状構成との関係が憶測される。そして、これらが羽状繩文系へと移行するなかで、同様な文様構成が相模域にいたらなかったことが、伝達の方向と時間差を象徴している。

銳角羽状の一群は、当初「下吉井式」とともにあり、自身の内面にも条痕を加えるなど、既存の条痕文系に影響されがちであった。しかし、時を経るにつれ立場は逆転し、条痕文系に由来する工具構成は影をひそめ、撚糸側面圧痕文が増加する。その後、羽状繩文系IA b階梯の構成を生みだした段階の奥東京湾域では、口縁部文様帶の設定と密接な関係にある単節（無節）による繩文施文、前代の名残である「菊名下層式」相当の単純条痕文、そして、あらたに貝殻背圧痕文の三大構成が主として器面を埋めることとなる。



第15図 関東在来の潜在化

関東にとって外來であり、華やかな口縁部の文様帯を擁する単節縄文の系列が精系であることに異論はなかろう。対すれば、在來の条痕文や、施文具に共通し、条痕文施文の後繼となる貝殻背圧痕文が粗系ということになる。だが、一見して判別できる粗系は次第にその量を減じ、北東北とおなじく、精系要素の寡占状態に近づく。奥東京湾域では、これを機に多彩な縄文原体の変化があらわれる。その大きな変換点は構成の I B b 階梯にある。

同階梯発生時の出土比率の変化をみると、貝殻背圧痕文の減少とは逆に、いちじるしく量比を増

し、しかもその後、同文がかつてになった比率とおなじような數値を獲得した施文要素がある。第二種結束や複雑な結節部の回転繩文である。つまり、粗糸のなかで、貝殻背圧痕文がになっていた役割がこちらに移譲されたとみなせよう。

これらを起源とした異条繩文系列の変化とその顛末は、前編「内的飽和」で述べた。同系列は、華やかな単節系列の変転に同調しつつ、細ぼそであるが維持されづけ、基層に抵触する構成を生みだした。すなわち、広域にわたる粗糸文様の縮小のなかで、外来の繩文施文に凌駕されたにみえる関東在地粗糸の心は、じつは一部の系列で付託・温存され、ひいては外来精糸そのものの構成を崩壊させる要因を作りだしたのである。

以上のように、精と粗の別や両者の特性は、類縁系内で共通する背景より醸成され、浮沈を繰りかえす。だが、それは、系内の個体群列として明確にさばかれるわけではなく、文様構成や要素の次元で相対的に識別されていた。個体への同居が示すように、精粗を意識しつつも、あいまいなままに扱われるのが特徴ともいえる。

さらに、個体のみならず、構成でさえも、繼承関係にもとづきつつも、精と粗の典型的な両極のはざまで変異することが許容される。東鉄路系でみたように、これが両者のあいまいさを助長するとともに、構成選択の限界をものがたる。つまり、構成偏差の理論的な容量は、そのときどきに認定された精と粗の視覚的遠近に左右されることになる。

そのようななかで、両者の区別があらわれると、そこにはつねに外在來の対立が反映されている。そして、どちらかが其時の個体群を席巻するとき、そこには粗糸の潜在化か、のちに述べるよくな精糸の断絶のいづれかが隠されているのである。

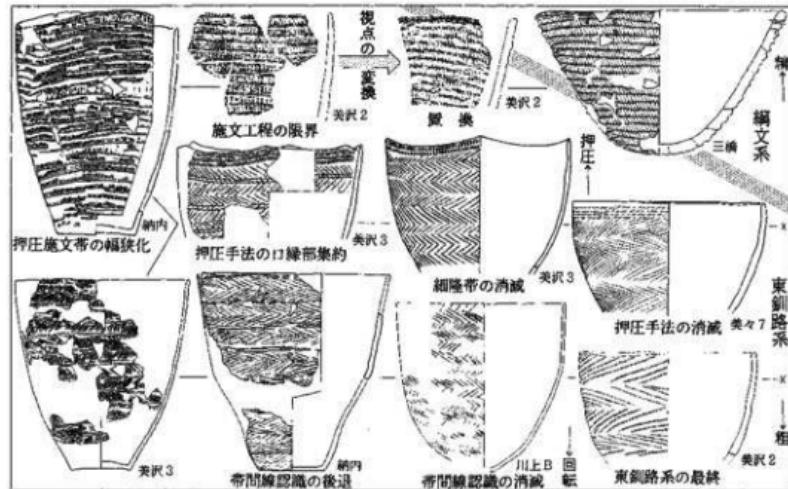
13. 置換と変換、移封と補完

前節では、羽状繩文系の源流にあたる東鉄路系における構成変化の手順を、精と粗のかかわりを中心に説明した。数ある変移のうち、根幹にさわる一部をあげたのみだが、繩があらわす方向線を源泉とし、心理的な変換により構成をささえる背景の変質がうながされ、視覚変化をとげたことが推察できるだろう。

変化的基軸には、隆帶を媒介とする表面的な置換があった。しかし、これを誘発したのは、つねに胸部における回転施文系繩文の変節であった。このような様態は、好まれた時空のへだたりにもかかわらず、前編で紹介した羽状繩文系のそれとたがうことがない。

「東鉄路II式」の擬羽状繩文で芽ばえた圓形認識の変換は、東鉄路系をつらぬく構成の両極を生んだ。また、「コッタロ式」では、縦位押圧帯と施文帯間線に対する変換が、隆帶への置換を誘発し、精と粗がさし示していた構成の混乱をまねいた。さらに、横帶の幅狭化でこれが助長され、帯間線認識の後退が精糸のせめぎあいに決着をつけた。そして、置換と変換は、東鉄路系を引きついだ新系（以下一綱文系と仮称）の成立にあたっても重要な役割をはたす（第16図）。

綱文系の由来となる「綱文土器」は、横走する太い繩の圧痕と厚い器壁が特徴である。その極端な姿は、東鉄路系との視覚的な差が大きすぎ、これを直接に継承したとは思えない。もちろん、現状では、その出自についても周囲に納得のいく説明はなされていない。だが、「綱文土器」の構成は、



第16図 「綱文土器」の成立

東鉄路系における一部の精系が変換され、省略模倣の欲求からあらたな施文法に置換されて完成したものなのである。

「綱文土器」の構成は、「中茶路式」で隆盛した単純縦横位構成を素材とする。前節では、同式から「東鉄路IV式」に移行するなかで、押圧系列が回転系列に収束されていくことにつぶれた。しかし、その過程でも、単純縦横位は、IV式の口縁部に遺留されるなど、根づよく保たれている。このことは、「中茶路式」で本質のすりかわりを経験してもなお、縦横位構成が押圧系列での基本であり、かつ、IV式の回転手法で併存しにくい图形であったことをも証明している。

さらに、「中茶路式」では細隆帯の貼付間隔が狭くなることもさきにふれた。これにつづくIV式の口縁部に残された細隆帯の間隔も狭いものばかりである。ところが、前編でループ文を例に示したとおり、幅狭化は単位構成の視覚効率を低下させるとともに、施文工程を煩雑にする。「中茶路式」における撚糸文の発生やIV式の成立・展開など、回転化の過程は、この効率の低下と省略模倣の欲求が高じつあったことをもののがたる。

これらがあいまって、細隆帯の方向線を綱文圧痕の条とみなし、それに直交する縦位押圧や撚糸文の方向線を単縦縦文の筋に見立てて構成へ視覚像が変換される。そして、発想に沿うような原体圧痕への置換がおこなわれる。

綱文土器史上に特異な繩原体の太さは、「中茶路式」の名残である単純縦横位構成の細隆帯間隔を反映している。加えて、太い繩によって残される条間の高い盛りあがりは、繩のみならず、細隆帯までもあわせて表現するもろみなればこそ強調されるべき線であったのである。もちろん、太い繩を深く押捺するためには器壁を厚くせざるをえない。また、構成をそのままに、施文具だけをか

える置換の規則性からすれば、繩が太いほど始原に近い姿であることも判明する。

羽状縄文系が属する類縁系のなかで、もっとも大胆な変換と置換がここにおこなわれた。異様な器體の厚さと太い繩は、構成の視覚効果をそのままに置換するための前提である。単純縦横位構成と「網文土器」の構成は、視覚差が大きく、そのままでは両者の関係を求めていく。しかし、置換と変換の規則性をもってすれば、みためほどに距離がないことがあきらかとなる。「網文土器」の構成は、東鉄路系の嫡流として粗系統一をすすめた「東鉄路IV式」に一部交差しつつ、別の変換によって同系を繼承した新系の精系となるのである。

だが、次節で述べるが、のちの網文構成は新たな変換をえられず、視覚的な衰退を繰りかえす。このような状況のなかで、とくに北海道央では、北東北に発した構成個体を補完して実際の土器セットが継続される。皮肉なことに、その先がけとなるのが、縄文土器の構成を移封した「長七谷地III群」の一部なのである。早期後半の北東北は、東鉄路系の構成を断続的に移封し、精系の発想をおぎなっていた。こんどは逆に、構成を北方に拡散する側として安定したのである。

ここで、同構成が、口縁部の横走線で共通する「東鉄路IV式」を母体とし、「網文土器」とともに、網文系に帰属するという考え方もある。しかし、おなじような継承関係の交差は押圧縄文の構成でも認められる。東鉄路系で生じた押圧縄文の構成は、「東鉄路IV式」や「網文土器」へと変化する過程で失なわれてしまう。ところが、前編でも述べたが、早期北東北の構成のなかでは一時留保され、南に拡散して羽状縄文系の成立に寄与し、「美沢3式」として北上もする。

網文系とは、北海道の前期前半に存在した土器個体群のうち、東鉄路系の構成と精粗の関係を継承し、工具文構成を指向しなかった一群にかぎられる。道南・道央で網文系とともに出土、あるいはこれを凌駕する「桔梗野式」や「美沢3式」、「春日町式」、「石川野式」などの文様構成は、同期の北東北と何らかわりない。これらは、北方の影響をこうむりながらも自立の歩みづけた早期北東北系の直系にあたる。つまり、東鉄路系とおなじ地域に展開しているながらも、文様構成に直接の系譜性を求められないのである。

ともあれ、網文系にそなわる発想力の減退は、精系への補完、ひいては分布そのものの後退をまねく。加えて、早期北東北で繰りかえされた移封と継承関係の交差を考えあわせれば、補完や移封の発生は、それを受容した地方や地域、そして構成のゆらぎを象徴することがわかる。また、その頻度は、構成に内在する可変性の包含量に反比例するのである。

一方、補完・移封の特殊な例は、甲信地方の羽状縄文系でみることができる。そもそも同地は、羽状縄文系と、別なる体系を維持した系との緩衝地帯にあたる。そのため、羽状縄文系の当初に成立した「中道式」などに統一をみるもの、その後は地域の異動めまぐるしく、類縁系への帰属も定まらない。そのなかで生じた「釧路堂23式」は、前代の指痕残す他系の伝統を受けつぎながらも、在来の粗系として安定した出土比を示す。

同式は本来、縄文の単純施文系列として成立し、口縁部文様帶の設定など、精系文様の構成を欠いている。これをおなじ縄文施文系としておぎなうのが、関東や南東北の有文土器である。現在、その多くは胎土の纖維の有無で識別されており、彼の地の構成をそのままに残す。対して、有文構成を在来粗系の手法をもとに移封した個体は、たとえば、初期の枠状文では地文縄文が羽状化しな

いなど、構成発生の経緯を無視したものが多い。

同地では、これに加え、体系の異なる北白川下層系までもが継続的な補完の対象となる。このような恒常化した異系との共存は、相いれないはずの構造の圧着を生み、補完勢力にしたてあげてしまう。時々かのほるが、「神ノ木式」や北陸「佐波式」のなかでは、口縁部に刺突帯を設け、以下を縄文でうめつくす構成がある。口縁部の構成に羽状縄文系との系譜性はない。しかし、のちに述べるが、胴部に横位刺突帯がないことからは、対峙する異系のしくみとも合致しない。

関東をはじめ羽状縄文系からもたらされた構成は、その後、まがいながらも移封から変化を遂成する。しかし、こちらは、そのままでしか継続できず、すたれてしまう。ところが、刺突帯にかぎり、羽状縄文系を起源とする別な構成の一部に移封され、精系である「大型菱形文土器」の口縁直下などをかざる。そして、対面する系では、胴部刺突を欠く縄文施文を徐々に拡大し、「北白川下層II b式」以降の本格的な胴部縄文構成を成立させるのである。

いうなれば、圧着構成が構造の異なる両系を交差させる透過膜の役割をはたしたことになる。たとえば、「神ノ木式」の刺突帯土器は、「羽島下層II式」の区画がない横位複数刺突列を真意に欠きながら複合口縁に施した。刺突帯は、口縁下の段差という区画線を獲得してはじめて、横分帶認識を重視する羽状縄文系への移封が可能となつたのである。補完は個体単位の移動である。したがって、どのようなものでも構成体系に矛盾はない。だが、個体に自他が同居する移封は、共通の地盤がないとかねられないことが圧着構成の行方で察せられるだろう。

以上からすれば、網文土器のような、自らの繼承関係をもとに構成変化するのが置換と変換であり、北東北早期や縄文系のその後など、これを放棄して一気に構成や組成変化をもくろむのが移封と補完にあたることがわかる。これら行為の対立を、土器製作者の立場からみれば、(他者)補完—移封—置換—変換(自己)の順で深層に近くなる。つまり、見かけのちがいよりも変化そのものにいたる過程をひもとくことが、構成体系の究明に必要なのである。

14. ゆきづまり

前段のように、「網文土器」は、抜本的な意識の変換と大胆な置換によって施文工程の省略をはたした。同土器は、東鶴路系につづき、石狩低地帯以西が独自に生成した縄文系の精系としてあつかわれる。だが、その後の「網文土器」は、隆盛するどころか、抑揚なく構成の共通をうしなつてしまふ。

じつは、工程の省略化をはたした構成も、そのままでは心理的厭気に対処できる変換をまねきにくい。そして、工程を省略したものの、逆に、施文の簡便さなど、行為そのものの負荷を要求される手法によっていたからである。そのあげく、網文構成の系譜は、変換の対象とはなりえない方向へと変化の歩をすすめてしまった。

「網文土器」の製作は、施文原本となる太い縄を準備し、深い押捺に耐えるだけの厚い器體を形成する必要がある。そして、縦横位の取りあわせを表現するために、条がめぐる方向線を横位で統一しなくてはならない。また、圧痕が単調で、深く、しかも大きいため、施文境などの不備が目だちやすい。施文を遺漏なくおこなうとすれば、かなりの気くばりが求められる。それでも当初は条内

の節をすり消すなど、さらなる加工さえもおこなっていた。だが、はたして、のちの推移とともに施文行為の省力化がはじまる。

手ぬきは、まず、施文に不都合が多い太い縄から開始される。使用原体を細くした結果、あらわれる条間は狭くなる。そのため、条内をすり消す加工の対象とはなりにくくなる。また、これにともない、深い施文にそなえた厚い土器をつくる必要もなくなる。ついで、横位への条方向統一がゆらぎ、むしろ回転施文方向が横位に近づくとともに、器面に対する条傾斜を強めていく。

器面に残る条の狭化と斜傾化が許容され、これが繰りかえされれば、いきつくさきは横位施文によるただの単方向斜縄文構成でしかない。しかも、発生時は最終捺りR方向がもっぱらであった施文原体も、Lを加えた両方向に統制が緩和される。これが、「中野式」の一部にある単方向施文の斜縄文土器である。

変換によってのみ構成の抜本的改革がなされることを前に示した。成立時の縄文的構成も、斜縄文と化した姿でも、これでは、ただちに変換の対象とはなりにくい。前編あげた羽状縄文系の変換の前提是、複数工程の胴部縄文であった。さらに、回転縄文が対象に値するには、条方向の変化や原体末端などの変化が必要である。したがって、斜縄文の単方向施文では、むしろ、ずさんな押捺で生ずる施文のズレなどを意識化しないかぎり、心理的な変換を呼びにくいのである。

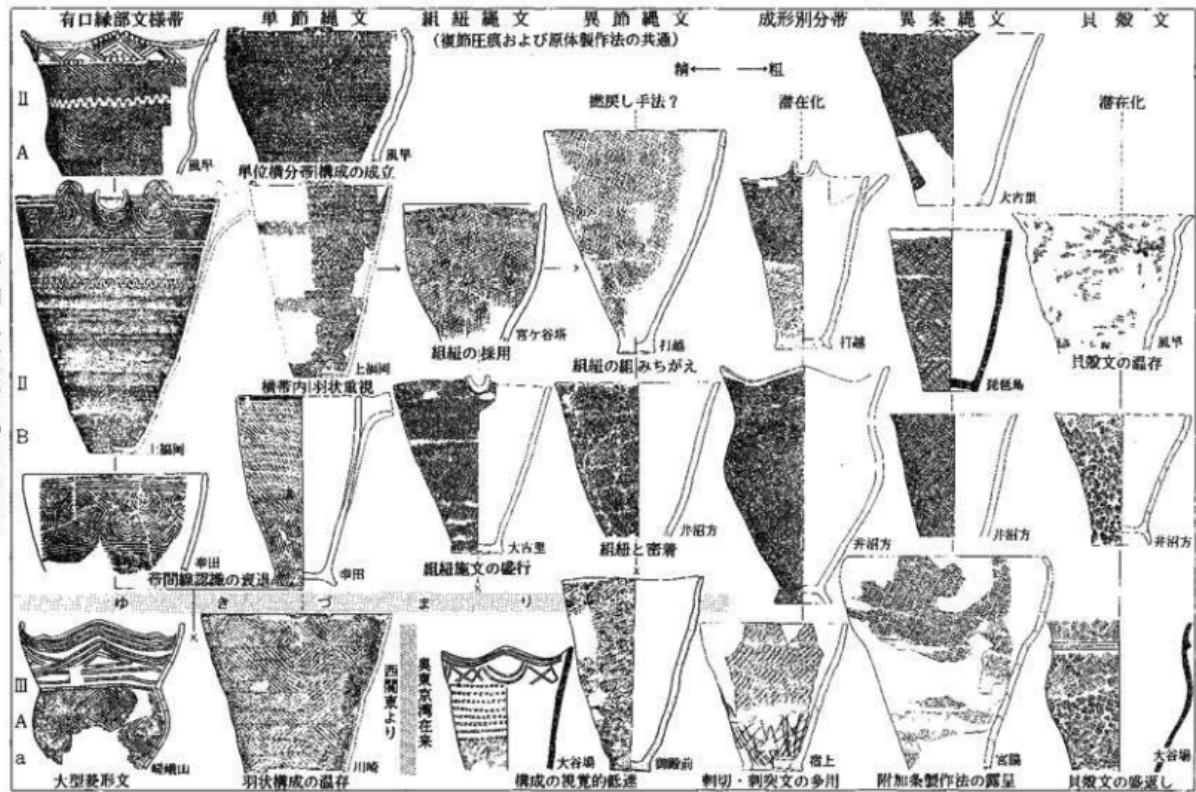
変換が生じなければ、その構成は細部に多少の変化を求めるながらも、そのまで長く維持されるか、断続するかのいずれかしかない。「縄文土器」の構成は、抜本的な変換をへばして当初の視覚効果をうしなった。そして、視覚的な華やぎが東鉄路系の粗糲を継承した羽状縄文構成と逆転するにいたり、精系としての期待をとかれてしまう。

この「縄文土器」がたどったような構造上の袋小路に「ゆきづまり」の語をとりあえずあてておこう。「ゆきづまり」は、関東の羽状縄文系でも生じた。それは、「関山II式」における組紐施文の流行が原因となった(第17図)。

前編では、変化のII B階梯で横位羽状構成への指向が高じたとともに、四本組紐が無数にこれを表すことができる施文原体として重用されたことを述べた。この傾向は、とくに奥東京湾域にいちじるしい。同城での住居跡一括出土の実態では、縄文施文のなかで、組紐原体の使用が90%をしめる例すらある。

ところが、構成をささえる意識の変換は、押圧や回転にかかわらず、縄があらわす方向線が唯一の振りどころであったはずである。方向線を認知させるためには、前出の条件に加え、器面に一定の長さや幅を占めてなくてはならない。それは、条、もしくはこれ以上の線にあたる。単位の羽状や、縦位押圧を模したつもりの縄文構成の節では、心理的な変換を誘発する方向線対立の認識に到達しにくいのである。組紐圧痕を「構成」として認知し、多用した奥東京湾域の構成変化は、ここに袋小路にはいったしまった。

その後に残る同城の構成は、とらえどころのない縄文施文がもっぱらで、精粗の対立などの抑揚に欠ける。一方、おなじころの西関東域では、単段の菱形構成を繰りかえす、羽状縄文系のIII A a階梯にあたる典型的な構成を獲得している。おなじII B階梯の構成系に到達しながら、同城は組紐施文に没入せず、斜縄文による帶内羽状と、帯間線認識のあらわれであったループ文で構成する崩



部繩文を別に継続させていた。こちらの方向線は、充分に変換の対象となりえ、後者をのぞくのみで変化をすすめることができた。

しかし、奥東京湾域は組紐が他を凌駕し、みずからIII Aにいたる題材を放棄している。羽状繩文構成は、関東のなかで精系として開始され、粗系に拡散してきた。つまり、羽状指向をきわめた粗系構成は、基盤である精系の「ゆきづまり」を招いたことになる。

そして、つぎに生じた変化とは、構成自身の転化や移封・補完ではなく、精系の構成を一気に放棄することであった。結果は、粗系とその周辺の構成だけがのこる。これを機に、同域では潜在化してたはずの貝殻文が増加のきざしをみせる。同文は、相系統一がきたした構成選択枝の不足が背景にあったからこそ、再度の顕在化がかなえられたのである。また、当然のことながら、構成の安定をさかえてきた精系の指針をうしなえば、確立した繩文構成を生みだすことができない。もちろん、ここには帯間線認識も存在しない。

さらに、前編の「極性階梯の省略・未到達」で一部の経過を述べたが、北東北や北海道南の羽状繩文系では、工具文に傾斜したがために「ゆきづまり」が生じた。

工具文は、同地における I A 階梯精系の網文的構成を置換して発生した。これも、I B a の幅狭化のなかでは、前代を反映した口縁と底部の施文位置からはずれることはない。その一方、I B では、羽状繩文構成から発した帯間線認識が高じつつあった。それも、当初は第一種結束文で羽状に付属するかたちで強調がなされていた。しかし、ループ文の発生とともに、羽状と帯間線表現の施文法の分岐がすすむ。そして、I B b にいたり、横位工具文は独立した帯間線認識をよりどころとし、本来の施文位置から脱し、胸部にまではいりこむ。

帯間線という方向線のみをあらわすループ文と連携を深めた工具文は、施文法を押引沈線から連続刺突文にかえながら II A 階梯にいたる。ここではもはや、帯間線認識を誘発した纏による羽状構成の意識はない。胸部に繩文構成が配置されたとしても、それはループ文で統一されている。

だが、変換は纏が題材となり、その方向線のとりあわせをいかに見るかよりはじまる。したがって、すべてが工具文と化した構成では変換の対象とはならない。ここでも関東とおなじく精系での「ゆきづまり」におちいり、やはり、あわせて維持されてきた粗系尖底土器のみが器種のすべてをまかうことになる。

このように、文様の構成変化のなかで認められるおおいがたい不連続は、その間における未知の編年の段階をさしめすとはかぎらない。視覚にうったえる急変が、むしろ連続を反映することもある。三例が示すとおり、「ゆきづまり」は、構成をささえる基層にふれることにより生ずる。それは、羽状繩文系だけでなく、類縁系内の他系にもあてはまる。

「ゆきづまり」は、外来である精系の構成変化によることが多い。また、これをへた構成は、在来を潜在的に継承する粗系やその周辺に収束されるのが一般的である。そして、表面的な指針を欠くため、残された構成も加飾性にとほしくなる。だが、逆に考えれば、一見低迷しているように見える繩文施文の状態こそが、「ゆきづまり」をかいぐり、存続を許されたわけである。つまり、虚飾をまとわぬ基層の核心をあらわにしていることになる。

15. 単相の構造力

前節では、「ゆきづまり」が構成の基層にふれる構造上の袋小路にあたることを示した。矛盾をさそうのは、加飾に富み、変化を重ねるため、本質から遊離やすい精系がもっぱらである。「ゆきづまり」を開けるには、基層だけを反映するような単純な構成にかえるしかない。それまでつちかわれた目に映る伝統を捨てるのだから、構成は指針をうしないがちとなる。そのなかで、北東北は、精粗の融合態をはぶく方向にあつたため、その後の回帰が把握しやすい（第18図）。

同地の工具文構成が衰退したのち、なおも製作がつづけられたのは、単方向の縄文施文尖底土器である。粗系の実質は、羽状縄文系のⅠ階梯以来、継続されている。だが、前述したとおり、当初は精系の強固な統一性におされ、あからさまに対立することはない。ところが、精系の工具文化がすすみ、さまざまな価値が追加されるにつれ、これに動じない粗系の実態があらわになる。

視覚差が芽えるのは精系のⅠB階梯相当からで、まさに、構成の拡散をうながした工具文への置換と期を一にしている。しかし、単方向施文にしりぞいたものの、単節原体をもっぱら利用し、R LとL Rがほぼ均衡するなど、羽状を好んだ前代からの繼承関係に依存している。また、末端に変化のない雑な施文ながら、一部羽状を構成し、精系の縄文構成に傾くものもある。

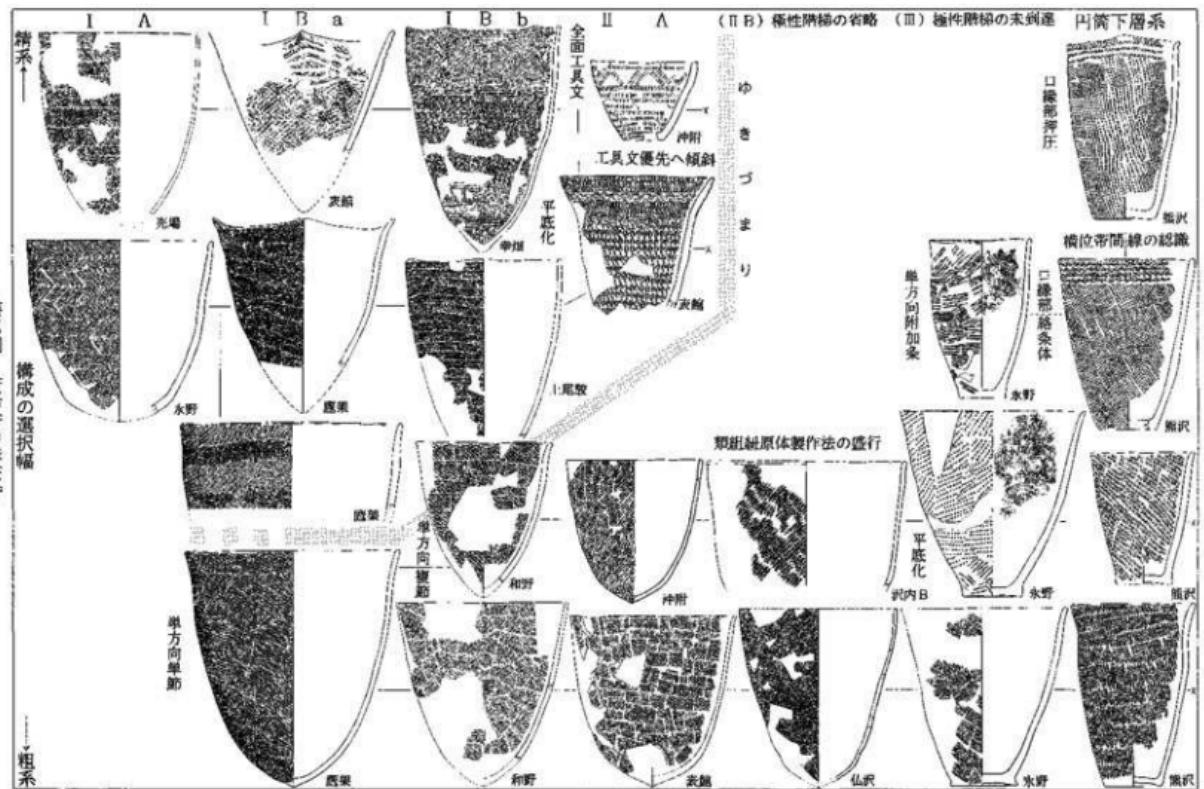
だが、ⅠB b階梯精系のループ文採用にともない、羽状構成が逆行する。羽状に要した等しい原体選択の下地がくずれたため、末端に変化のない粗系単方向施文の純系列ではL R原体が優勢となり、あわせて、複節圧痕の施文原体もあらわれる。そして、全面を工具文でおおいつくす構成が盛行するⅡ階梯では、精系ループ文の短足化が極まり、ますます精粗の視覚差が深まる。これとともに、粗系自身も燃りの偏向を強め、複節圧痕の施文原体がさらに重んじられる。

このようななかで、精系にあたる工具文やループ文による縄文構成が放棄される。その前後で粗系の構成に大きな変化があったわけではない。関東では精粗の歩みよりもすんでいたため、「ゆきづまり」後の回帰にあたり、粗系と目される異条縄文系列までも構成がみだれた。これに対し、北東北では、精系とのあいだにあるべき構成の理論的な選択項をはぶいたがために、余波をやりすごすことができた。

ただし、細かな変化は着々と加えられ、そのなかには広く編年的な同時性を示すような傾向さえもみることができる。それは、関東の組紐などにみられた節への注目にあらわれている。関東で節単位の強調に好まれたのは、組紐や擬異節など、燃り縄に換算すれば3段の節圧痕を残すものである。おなじころの南東北でも、量的にはわずかだが、組紐や、3段の圧痕しるす施文が選択枝として安定する。これらの原体製作は、組紐のみならず、擬異節や擬複節もその組みちがえによるのが実態であり、組紐系の施文としてまとめることができる。

そして、編年に同期となる「ゆきづまり」直後の北東北でも、圧痕上の擬複節とともに、組みちがえによる見かけの単節縄文がもてはやされる。そのうえ、同地では前代の傾向を受けつぎ、原体製作の如何や、圧痕からみた原体の段数にかかわらず、条の方向が左さがりになるものに指向が集中する。

これは、最終がLの燃り縄が横位に施文されたときの圧痕の条方向にあたる。施文位をそのまま



に、結果としてあらわれるる条の方向を優先させれば、用意する縄文束の方向は燃り繩換算の段数によって逆になる。それまで強めてきたのは、LRという、縄文を燃るときの取りきめであった。しかし、尖底器形の最後にいきついた節単位の着目が、これを原体から、段数にこだわらない圧痕の条方向にかえた。

節への注目でもてはやされた組紐系の施文が表れたのち、同地では、器形を平底にかえつつも、粗系尖底土器の立場をそのままに継承した「永野4群」や「深郷田式」へと移行する。そこで縄文指向は、前代のL好みをそのままに、単節、複節、そして、条方向線を強調するために新たに加わった絡条体の回転であろうとも、こんどは1段での燃り方向に意識が集中する。単節ではRLが相当し、工具文とともに傾向を強めた以前のLRとは反対になる。節単位への着目が継続性をみだし、その前後では強調をめざす原体の燃り方向が逆転してしまうのである。

このように、粗系尖底土器の系譜は、精粗の対立時も、工具文が消滅したあとも、わずかながら変化をかねている。だが、そこに、関東とおなじような手順をふむ自立した変換が介したわけではない。胸部縄文の抜本的な構成変化はみられず、單方向の全面施文縄文が継続されている。

変化の過程でわずかに主張を深めるのは、「永野4群」がめざした附加条や絡条体原体の多用である。これは、羽状縄文系III階梯の関東・南東北における条方向線の強調にあたる。しかし、それまでの構成自身にこれを誘発する要素はない。つまり、南の趣向を取りいれたということになる。これは、前編で述べた極性階梯の省略に相当する。

その後の「永野4群」は、施文原体の絡条体化を一段と強める。横位の押捺方向をそのままに、絡条体を回転させれば、斜縄文とのあいだに条方向の偏差が生ずることになる。あらわれた条方向の多くは個体内で統一されている。だが、施文方向のズレからはじまり、これを意識的にかえるもののがあらわれる。

その独立観を口縁直下に集約し、綾縄文で置換したうえに、胸部に斜縄文を配し、対立をもたらせたのが「円筒下層a式」の主たる構成である。ここではじめて粗系の系譜に視点の変換が自生し、抜本的な構成変化へと発展した。そして、結果として、関東のIII B階梯にあたる構成を経ずに新たな円筒系へと移行したことになる。こちらは極性階梯の未到達に相当する。

それは、新系への移行にしては外來の大きな影響なく円滑に行なわれた。前編では極性階梯の未到達が基層の温存にかかわる問題であると述べた。極性の最終であるIII B階梯は関東にあった。これは、器面を大きくおおう構成であり、類縁系の所属条件となる追加成形施文法と対立する。あげくは、構成を優先させ、成形法をとてさった。

しかし、「永野4群」は条線強調のIII階梯にわずかに同調しながらも、器面全体への割り振りを要する構成に展開しなかった。これらをおおうのは単純施文の全面構成である。追加成形施文法での施文は、横位線で画されずとも、地文的であるかぎりは許容される。つまり、構成と成形法の確執が生じなかつたことになる。

加えて、北東北の粗系は、長いあいだ単純かつ変化に乏しかった。変化は主として伝達のなかで醸成される。また、あつかう素材が複雑などとに粗筋が生まれ、基層にふれる確率も高くなる。つまり、北東北の粗系や「ゆきづまり」直後の単純な姿は、基層の維持に適していることになる。さ

らに、これが長くつづいた北東北の状態は、視覚的な低調とはうらはらに、基層認識が強く根づいていたことをものがたる。そのため、矛盾をきたすことなく、類縁系に帰属しつつ新系への移行がかなえられたのである。

さて、こうして成立した円筒下層系は、a式の口縁と胸部の原体差から文様帶区画線を獲得し、口縁部文様帶構成を確立させた。以降、細部に数々の変化を加え、視覚的な変遷をとげながらも、中期上層系の終末まで構成の大枠をくずすことはなかった。これ以外の構成をもちいる個体はまれで、口縁部文様帶の有無などで対立を際だせることははない。

東訓路系でみたように、個体群内の偏差は精と粗の極分化にはじまっている。共時態における自家の構成変化は、典型的な両極のはざまでおこなわれた。つまり、精と粗の意識に不足すれば、構成変化の選択幅をせばめることにもなる。円筒系は北東北が保持した在来粗系のみをそのままに継承し、成立時の構成変化にあたり、外来構成が大きく関与することがなかった。そのため、構成選択の許容量が限られてしまうのである。

羽状繩文系を論すべき本題から離れすぎるので多くはふれないが、おなじような傾向は、北海道前期から中期にかけての繩文施文系や北簡系でも認められる。これらのなかにも条方向の着眼から羽状繩文構成を獲得し、さらに帯間線の強調をはかるなどの変換や置換はある。しかし、工具文の発達や、精粗の極分化など、目に映る華やかさや構成選択の幅広さを演じる要素にとぼしい。これは、羽状繩文系までにいたる類縁系の経過と趣を異にする。つまり、類縁系における構成体系の発現は、羽状繩文系が終末を迎える前期中葉を境に、前半と後半にわけることができる。

類縁系の前半期では多くの場合、精粗が構成偏済の両極となり、その幅を規定する。このような様態を、構成の基層から導かれる可能性の全数としよう。

そこでは、たくみに施文の省略をもぐろみながらも、外来の精系を中心として、類縁系の基層に数々の趨向をおりこむことに執心した。ところが、前期前半の羽状繩文系では、ほぼ期を一にして工具文が隆盛し、綱文系を加えたそれなりのいきさつから「ゆきづまり」におちいる。これは、分布の広域化にともなう基層認識の拡散と、継承に不適な構成に蓄積された矛盾の飽和とみることができる。

これに惹いたというべきか、後半は在来の粗系に重きをおき、基層を温存する方向に収束する。こちらや「ゆきづまり」直後の姿は、精と粗の共存に対して半数（単相）と表現できる。

粗系やその周辺に構成が終始するということは、視覚的に低調とか単純という解釈で語られがちである。しかし、単純と構成選択の限定こそが、「ゆきづまり」をかいくぐる手段であったことを前節では示した。そして、北東北の粗系にみると、むしろ構成体系の継承に適した様態であった。つまり、羽状繩文系を含む類縁系にかぎっていえば、単相化とは、基層に近いのみならず、精と粗をあわせもつ全数状態にくらべ、防御にかなう構造力がそなわる存在形態なのである。

16. 類縁系の終末

前節では、類縁系の後半期に成立した各系が、前半期とは一転、抑揚をもたない変遷の過程をたどることにふれた。その背裏には、構成をそのままに維持するための単相化がひそんでいたことも

確認した。それでもなお、円筒上層系の口縁部文様帶内にみると、施文の省略や、構成をささえる意識の衰退は、時にしたがいきがたいものとなる。

類縁系に属する各系のうち、時空でとなりあわせとなる系間でおこなわれた継承や伝達は、これまでいくつかを題材として取りあげてきた。ここでは、各地での終末にかぎって比較してみよう。類縁系は北海道から関東や甲信・加越にまで展開した。これらがひととくに、かつ、おなじような終末をむかえたわけではない。それぞれは、微妙にことなる最期をとげる。その地方差をひととくことで、基層の發信源や、各地の基層に対する構えを推測することができる。

関東における類縁系からの離脱については、前編の「内的飽和」で一部の紹述をのべた。同地での終末をまねいたのは、在地の粗糲系を継承した異条織文の系列であった。これらは、附加繩のさらなる強調をもくろみ工具文への置換をおこない、縦横の施文帶間線を追加して「枠状文」や「葉脈状文」をうみだした。さらに、単節繩文の系列がめざした菱形構成の大型化にともない、構成の拡大をはたした。

ところが、単位構成が大きくなるにつれ、施文を前にした器面全体への割りふりが必要となってしまう。これは、類縁系に共通し、基層をささえる根幹をなす追加成形施文法に抵触するものである。そのゆくえは、「ゆきづまり」をへて単相にかえる消極的な行動を選んだのではない。類縁系の重要な所属要素であった成形施文法を放棄することで構成の飽和状態を開拓したのである。それは、みずからがめざした方向をもとに類縁系を離脱した積極的な終末の姿である。

その後の「枠状文」や「葉脈状文」は、連続した変化のなかで、新系の文様構成要素として継続されいく。そのため、順当な変化の過程に構成をささえる心の重大な変化があったとはなかなか確認しづらい。

これに対し、南東北では、類縁系からの離脱にあたり、積極的な変化への指向が介した形跡はない。前編「極性の省略・未到達」で述べたとおり、この地での最終にあたる「大木2b式」は横位不整撚糸文などを胸部にしるすが、器面を大きくおおう構成の連携と、結果として生じる胸部の縦位設定線はついぞ設けられなかった。つまり、追加成形施文法をみずから放棄する動機はない。

離脱後の「大木3式」にはどこかされる胸部繩文は、系譜性のないRし主流の単節繩文へと変化している。狭い口縁部文様帶は前段に通ずるところだが、そこにめぐる山形文などの単位文様は、繩文施文原体のかたよりとおなじく、関東の特徴が移入されたものである。そして、個体群すべてからみた構成の視覚的な低迷は、影響をこうむった関東というよりは、むしろ円筒下層系の初期における抑揚のとほしさに似ている。

一方、羽状繩文系の衰退後も類縁系への帰属を保ちつづけていた北東北も、円筒上層系を最後にこの仲間から離脱する。その過程には、南東北にもまして、新系にいたる構成の抜本的変化をうながす積極的な変容はみられない。

ただし、口縁部文様帶の内部では、施文手法の省略はてに「円筒上層e式」で描線を隆筋から沈線へ置換する。これは、隣接して分布する中期大木系の描線に触発されたといわれる。これまで独歩を重ねていた円筒上層系の構成が、押しよせる南からの波に融合をはかったともとれる。

しかし、置換は構成の粹粋みをそのままに、施文具だけを持ちかえるものである。したがって、

構成にはさしたる変化は生まれず、基層を共有しない同系への歩みよりをはたせない。そして、直後の同地には「大木 8 b 式」に相当する「複林式」が展開する。円筒上層系の構成をそのままにのこした「e 式」と、中期大木系に属する「複林式」は、構造上の差がおおきく、わずかに残る弧線構成をのぞき、在地の繼承関係がとだえたと表現できる。

そのうえ、北海道、とくに道東では、類縁系の最期をになう北筒系の終末や、そのあとにつづく順当な変化どころか、地域における土器群の盛衰そのものがまったくあとづけられないのが現状である。しかし、「丸松式」などが北筒系の最終でないにせよ、加曾利 B 系と親縁関係にある「エリモ B 式」などや、御殿山系との編年的な間隙はわずかである。いずれにせよ、強固な結びつきを誇った類縁系は忽然と姿を消してしまい、あとにはまったく「ちがう」構成を擁する類縁系が展開するのである。

このように、各地方における類縁系の終末をひとくと、南ほど順当に新たな類縁系へと変化したことが確認できる。反面、北ほど唐突にその伝統を放棄する。関東は、積極的な変化によって別の体系を成立させ、完成した文様構成体系が当初から存在する。また、南東北は、「大木 4 式」などの失地回復の経過をみれば、関東からの影響をうけつつ、やや消極的な自己変化をとげたといえる。

これに対し、北東北は、円筒上層系の最終に自己変化のきざしをみることができるもの、やがてはまったく構造の「ちがう」体系に取ってかわられてしまう。さらに、北海道央から東は、まさに唐突に類縁系が維持してきた構造が消滅する。

類縁系に属した各地の最期は、北方よりもたらされた基層の一連の弱体化がまねいたわけではない。もしそうならば、いずれもが似かよった終末の様相を呈してもおかしくはない。関東など、列島の中央で羽状繩文系にかわって生じた別の体系が、時をへるにつれ、北方に伸張する過程をものがある。そして、これに抗し、北ほどに類縁系が共有した文様構成の基層をかたくなに守り、発信源となりつづけていたことを示唆している。

羽状繩文系は、北海道繩文系がおちいった見かけの低迷をよそに、南ほど華やかな工具文が隆盛し、数かずの変化をはたした。また、調査数の疎密を補正してもなお、当時の土器生産力は南が北にまさる。これらの表面的な事象から、文様の影響関係を論ずるに際し、南からの圧力がよく引きあいにだされる。しかし、土器生産の先進地と、文様構成や発想法の起源地が一致するとはかぎらない。そして、南の文様構成は、いわば借りものの体系に、時をこえて地域に根ざした装飾感覚が上のせされ、あでやかさが演出されたにすぎない。

もちろん、土器づくりのすべてが北方よりの波及原理で維持されたわけではない。ちなみに、尖底・丸底器形の発生と拡散は、早前期における列島中央からの周縁論で語ることができる。また、羽状繩文系をはじめ、類縁系の多くで認められる胎土への纖維混入も、実は、既存の手法が、素材の共通をよりどころに、繩を重視する系のいくつかで厚く遇されたとみるべきで、これらに特・通有のものではない。

二つの属性は、各系の弁別や影響関係の認定に、指標としてつかわれることが多い。だが、弁別や認定の現状は、主として文様構成によっているはずである。羽状繩文系の構成は器形や纖維の

有無にいちいち対応をせまられるものではない。たとえば、「中道式」のように、胎土に織維がなからうと、帶間羽状構成の施文がとどこおるわけではない。また、網文的構成から発した「和野8群」の尖底部加飾は、南にくだるにつれ、「桂島式」や「ニツ木式」の平底外周と底裏面の施文へと姿がかわる。別帯加飾の意図は、器形のちがいで、いささかも隠密されることはない。

文様構成や各系の範囲を識別するに際し、器形や胎土の特徴は、手っとりばやい十分条件となることもある。しかし、おなじ土器からえられるにせよ、そもそもことなる属性の分類系を混淆する矛盾はおおいがたい。ことなる属性ながらも構成を左右した成形法とちがい、こと羽状縞文系とその親縞系については、器形や胎土は弁別の必要十分条件にはなりえない。

類縞系をひとくとももっとも有効な文様構成の基盤は、顧みられることが少なかった北ほどによく保たれていた。それは、類縞系の後半期における単相化傾向と、各系がむかえた終末の様態差によって間接に証明できるのである。

17. ふたつの類縞系

本編では、これまで、羽状縞文系をふくむ類縞系の大まかな推移と、それらにつらぬかれる共通をみてきた。類縞系のあいだに継承された基層は、東調路系でつちかわれ、北筒系を最後に衰退する。北に発した類縞系は、時降るにしたがい共通の基盤を南にひろげていく。そして、到達したもっとも南方が前期前半における関東・甲信越の羽状縞文系であった。

ひるがえり、その勢力の減退は南方よりはじまり、拡大とおなじような瓦解の過程をふむ。羽状縞文系のみでこの類縞系の傘下となった南東北と関東は、伸縮ともまたたく間におこなわれる。これに対し、早期縞文施文系や円筒下層・上層系をはぐくんだ北東北や北海道南は、石狩低地帯以東には劣るもの、早期後葉から中期前半までおなじ体系が継続する。

伸縮の経緯とは逆に、各地における類縞系の最期は、南ほど順当な変化があとづけられ、北ほど唐突であった。つまり、南に成立した別な体系の侵食によって共通の基盤が凌駕されたのである。そして、このことは、単なる時の長さだけでなく、北方ほどに構成の基層を根づよく残していたこともあらわしている。

それでは、羽状縞文系とおなじころ、より西方に盛衰した各系では、北方のような紐帯が認められるのだろうか。

はたして、ここでも北とおなじような縁故の間がらが存在する。しかも、これらは北なるものと対立しながらも、おどろくほど似かよった系間の動態を保ちつづけたのである（第19図）。

羽状縞文系と並行し、東海に「木島式」が分布していたことは前にも述べた。同式は指頭痕のこそ薄い器壁がとくに注目をあびる。だが、これを文様構成の面からみれば、無文地に口縁と胴部の二帶で、一部は複数の、横位線列をめぐらし、区画線にはあまりこだわらない特徴がみてとれる。おなじような構成の趣旨は、施文具をこえて、のちに展開する「北白川下層I b式」にまで継承された。つまり、一定の時間幅を通して維持された、確固たる構成法と解することができる。

つぎに空間に目を転じ、類似する構成をたどっていくと、「羽島下層II式」などを介し、九州で好まれた轟系に到達する。同系の通有的な施文は、条痕調整に追加されたみみずばれ状の隆帯でまか

なわれている。しかし、刺突を特徴とする点列と、タガ状にめぐらされた隆帶の、施文手法上ちがいはあれこそそれ、数かずの付加的要素を取りのぞいた構成の骨子は東海とおなじである。

さらに、轟系が展開した九州では、表裏を問わず貝殻文を重用することで共通する気風がつらぬかれている。このような傾向は、早期貝殻文系からすでにあり、アカホヤ火山灰の隣下にもかかわらず、前期轟系から曾畠系に継承される。さては、内面調整に済在化しながらも、後期市来系まで継続している。

「木島式」や「北白川下層系」前半と、轟系の同期における構成の共通、そして九州に脈々と受けつがれた貝殻施文の系譜を考えあわせれば、これらは、羽状縄文系をめぐる類縁系とおなじように、親縁関係にあるとしてよいだろう。一部の例外をのぞき、無文地に点や線で線列文様をえぐく構成の基本は、主として回転施文繩文が面単位の構成で器面をうめつくす羽状縄文系などの発想とはまったくちがう。さらに、中期大木系と円筒上層系の構成法が異なるように、船元・里木系と阿高系もまた「ちがう」。

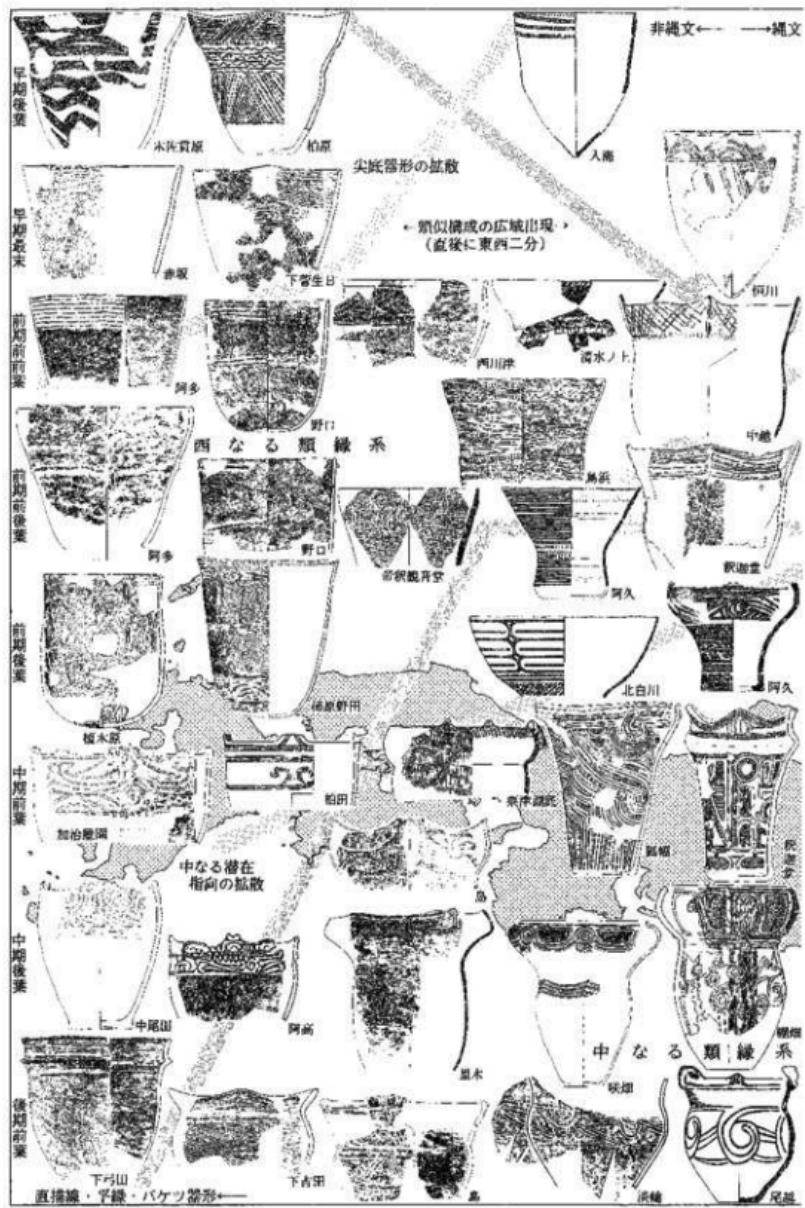
そのうえ、これらをひとつの類縁系としてみるならば、九州島での発生と衰退の時期、繩文前期前半における列島中央へのめぐらしい分布の伸長と縮小、また、各地における終焉が中央ほどに順当で、九州島に近づくにつれ唐突となるなど、これまで示してきた羽状縄文系をふくむ北なる類縁系の動態と共通がみられるのである。

列島におけるふたつの極が、広域かつ長期にわたり文様構成をささえ根幹の発信源となり、しかも、両者に直接の連絡がないにもかかわらず、その展開の時期、動態にいたるまでが類似する。両極が単独でこれを成しとげたと考えるには無理であろう。それぞれの背後、すなわち大陸に、さらなる大きな力がひかえ、その興亡が両類縁系の展開に短期・長期の影響をおよぼしていたと解するのが節減の原則にかなっている。

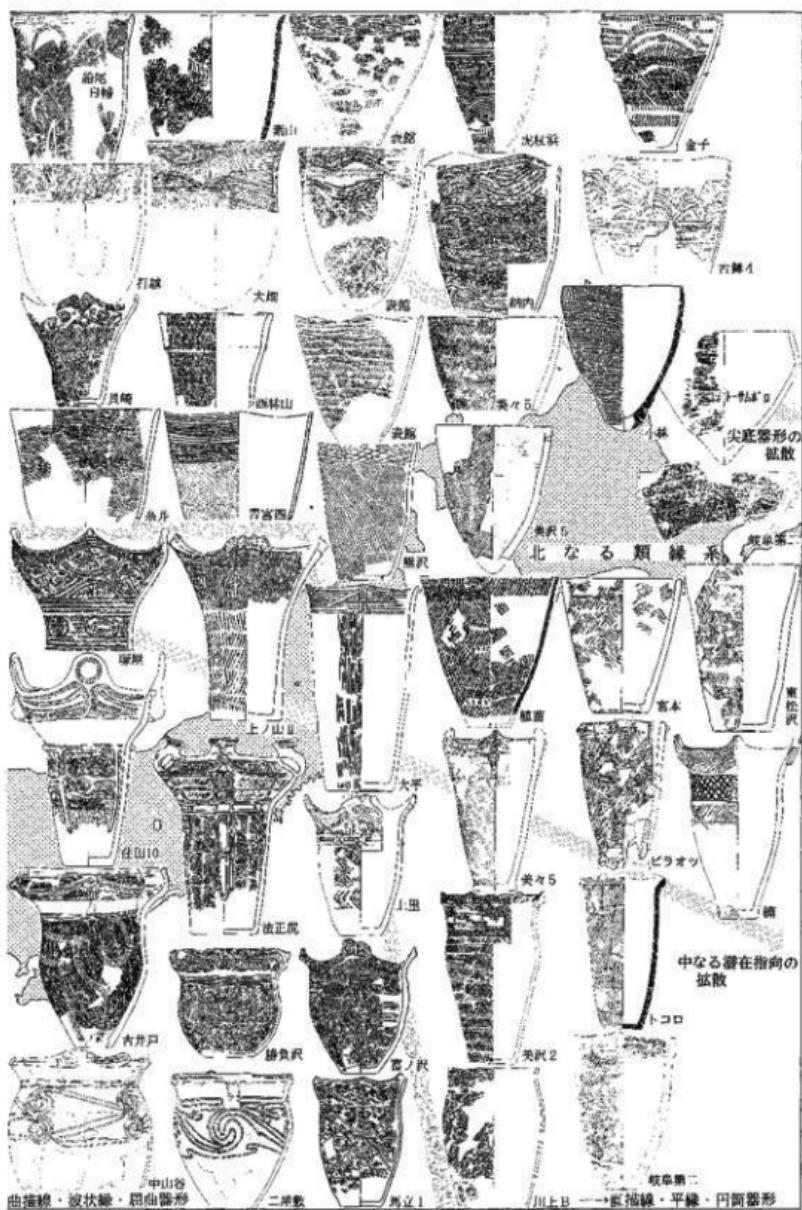
残念ながら、ここでは大陸とのかかわりを云々する資料を持ちあわせていない。だが、西では轟系や曾畠系が、搬入・搬出の有無や、朝鮮半島の隆起線文・櫛目文土器との関わりで取りざたされている。これに対し、北でも、類縁系成立時の轟系文様要素として、大陸系と目される石刃鐵石器群を擁する平底系の押圧縄文を取りいれたことをさきに示した。これらを考えあわせると、直接の親縁関係ではないにせよ、土器文様に関する情報が両極に降りそいでいたとすることは、あながち野放図な仮説とはいきれないだろう。

また、この仮定のうえにたてば、少なくとも前期から中期後半にかけて、列島の両端は北と西の類縁系にふさがっていたことになる。羽状縄文系にかわり、中央に君臨した「ちがう」構造のまどまりが、複数の類縁系となるか、はたまた勝坂系を時空の中心として連携するかは、構成をつらぬく基軸を見いだせぬいま、判断がつかない。しかし、これらは、陸路や沿岸をめざすかぎり、両極のあいだにしか発生の地や継続する発信源を求めるべくして、ひとつに取りまとめられる。つまり、羽状縄文系の周囲では北と西とが列島を二分する、いわば東西の対立と、中央が加わる三者鼎立という、文様構成からみた類縁系動態の二類型がめぐらしく入れかわっていたのである。

もとより、北なる類縁系構造の到来により、各地に根ざした伝統的な好みのすべてがおおいづくされてしまったわけではない。たとえば、少なくとも前期から晩期までの関東周辺では、曲線文を



第19図 ふたつの類縁系をめぐる周辺



多用し、かつ、船形器と波状口縁を個体偏差の至上とする指向が底流にある。さきにも述べたとおり、羽状縞文系では、これが類縞系の基層に加えられたことにより、我われを惑わすばかりの視覚的な華やぎをえた。

このような、時を越えた地域の潜在力は、「様式」あるいは「土器群」を操作しつつ導きだされた意見のなかで、地域史的な側面を分布の点から強調した小林達雄の「クニグニ」（小林1983）に通ずる傾向である。対して、類縞系の動態は、土器というかぎられた対象ではあるが、列島における文化史的な一面をあらわしている。

さて、北と西の類縞系を駆逐しつつ分布をひろげた中央は、後期中葉にいたり、列島の多くを席巻する。おしまくられた北と西は、北海道東と南九州に分布を縮小し、逆に千島や南島に分布を広げる気配をみせつつ最期をとげる。両地域は、それぞれが追われた島内でも、大陸との最短経路からはずれている。大陸との隔離と類縞系の最終が時をへずにおとされたことは、はからずも、両類縞系の支持母体を暗示している。つまり、中央からの圧迫に加え、連携先との遮断が基層を維持する機能喪失に拍車をかけたといえる。

そして、その直後には、ふたたび東西の対立が明瞭となる。東日本で隆盛した後期後半から晩期前半の文様構成は、一般に、縞文をもちいる点で西日本と際だったちがいがある。しかし、文様構成の構造上からすれば、北海道東の残党が勢力を盛りかえしたものとはいいがたい。なぜならば、それらに共通する体系は、縞の方向線を構成の起源とするものではない。

また、これをもとに羽状縞文系の周辺をふりかえれば、その直前にも似たような現象が生じていることに気づく。こちらは帰属した類縞系を異にしながらも、縦位の方向線地に横位の弧線や波状文の描線を口縫部に集中させる。施文具や仔細についてはことなるものの、それらをつらぬく構成の骨格にちがいはない。

時をへだてておとされた、類似した構成の席巻は、まったく反対の経過をたどることで達成された。一方は北と西の伸長の過程で、そして後期では、中央が膨張した極限として生じたのである。しかし、鮮明な東西のちがいをあからさまにする直後の展開を加味すれば、共通が単なる偶然とはいえない考えにくい。広域での同調という状態が、なんらかの地政、あるいは社会学的な必然を呼び起こし、東西対立の引き金となったことも考えられる。

もちろん、類縞系の消長も、ごく限られた時期をのぞけば、単純、一律ではない。前にも述べたが、尖底・丸底器形は東西の類縞系の中央への浸透に抗し、中央から両極に拡散した周回論で把握できる。また、東関東や北陸、山陰にみると、前期末の東西の反攻、さらに、中期前半の中なる潜在指向の拡散など、細かな攻守を繰りかえしつつ最終的な局面へと収束する。この表層での逆流やせめぎあいが、類縞系の承認をさまたげ、実態を難解にしていたのである。

ともあれ、羽状縞文系が属する北なる類縞系だけでなく、これと對峙する西なる類縞系をあわせ考えることにより、実資料ではにわかに推しはかれない、さらに遠方へと文様構成上の縁故を求めることができる。また、中央に発した類縞系を加えることにより、列島で作られた縞文土器の文様構成が、極地だけでなく、中央部でさえも、固有かつ一枚岩ではないことの類推が可能となる。

東西対立と中央の盛りかえしは、細石刃文化、はたまた稻作をめぐる攻防などの、考古だけが語

ることのできる年代にかぎらず、列島史のあらゆる局面で顕在化した。なかでも、大陸に寄りそうように分布する、ふたえの花綵列島なるがゆえの宿命をひもとくには、類縁系の概念を取りいれることで、もうひとつ、格好の題材が提供できるのである。

羽状縄文系の文様構成法、そしてそこから類推できる文化の一側面は、縄文前期前半の本州島東部でひとり終始するわけではない。羽状縄文系土器の検討は、今後、細かな事実認定とともに、この大きな流れをも念頭に建議や修正を重ねなければならないだろう。

18. おわりに

以上、本論では、羽状縄文系と、その周辺に展開した土器群の文様構成について、変化の手法や境界、これらに通ずる基層など、いくつかの題材をとりあげ、解説を加えてきた。それぞれの事例については詳細を欠いている。対象をしぼりつつ散りばめた、こまかなる点の総体が羽状縄文系の性格と全容を映すよう配慮したためと理解いただきたい。

本論は、文様構成という限られた侧面ではあるが、公理的な方法のいくばくかにならい、土器を「論ずる」ことをめざした。羽状縄文系にかかるこれまでの知識や筆者の認識から、枝葉をすべてこれを抽象化する。その過程であらわれた微妙にちがういくつかの偏差を逆手に、多くにつらぬかれる基軸をさがしだす。公理的方法での証明不可能な自明の真理とは、羽状縄文系土器における文様構成のすべてが「縄の圧痕があらわす方向線」はじめられる、ということである。

この深層と、追加成形施文法という技術面の制約に発し、置換と変換、「ゆきづまり」や内的飽和などの論理が導きだされる。これを具体例にあてた、たとえば北海道「中茶路式」から「縄文土器」への大胆な変化に対する解釈とその証左は、そもそも無機的な統計操作であるべき編年作業の過程では発想に到達しにくい。おなじく、文様上の不連続が、実は編年上での連続を保証していた北東北の工具文構成のゆくえや、関東の組紐施文の途絶、あるいは、西関東から北信濃にかけて隆盛した大型菱形文構成の源流なども、この論理連環のなかで、これまでにない説明が可能となる。

そもそも、縄文土器をめぐる公理系など築けるかと疑問を示す向きもあるやも知れぬ。だが、土器づくりは、各人の好みにより、やみくもに行なわれていたわけではないだろう。なによりも、あまたの土器にしるされた文様は、視覚の上で均等にばらつかず、一定のまとまりをもって我々の目に映る。なにも我々が分類好きだからではない。それは、往時の人々がはからずも陥れた規則性的一面でもあるはずである。それならば、逆に、その予定調和をもとに、現在未知のままにある領域を考えることもできるではないか。

抽象化を前提とするこの方法は、もっぱら具体化をめざす編年作業や地域間交渉の復元とは発想の方向がちがう。たとえば、前編では抽象化から得られた、IAaからIII Bまでの羽状縄文系における構成変化の諸階梯を示した。だが、これは、抜本的な変化の手順をあてたもので、絶対時間のなかでの共時態や継続期間の一致をあらわすものではない。実態では、形質の脱出や温存、はては極性階梯の省略すらもまま生ずるからである。

本論の趣意は、こまかなる事実関係の把握にそぐわぬなじみがたいものと受けとられるだろう。しかし、これはなにも建設的な編年作業を否定しているわけではない。筆者はかつて二ツ木から関山

期に古東京湾域で製作された土器の細分編年案を示したことがある(黒坂1984)。かつての宗旨を放棄するどころか、現在も、手法、私案ともに変更の必要を認めていない。

筆者と例外ではないが、冒頭にも述べたとおり、羽状縄文系土器に関する近年の資料蓄積は、編年的細分化をおし進めるとともに、さまざまな、そして断片的で無秩序な個別解釈をはぐくみはじめた。このままでは近いうちに、具体化の方向は、実態の混沌にも増す、こまかなる発見の混乱を整理するのに時を費やすこととなるだろう。そのような事態を招かぬためにも、大枠を共有するための総合化をはからなければならない。個別の羅列ではない。あつかう対象がふくらむほどに抽象的な概念の導入は避けがたくなる。

もちろん、抽象と具体的の連携が理解を深めることはいうまでもない。編年作業に欠かせない「型式学」と表現される手法の成果は、厳密には、形質変化の極性を規定するのであり、そのまま共時性にあてることはできない。そして、それは置換と変換の論理に負うところが大きいはずである。また、極性階梯の省略や「ゆきづまり」の論理は、こまかわせによる編年的並行関係の設定を修正させるだろう。これに対し、本論のように、抽象化のなかでも通時的な変化を題材とした作業の過程では、編年的な予備知識なくしては、発想や検証に窮るのである。

ともあれ、ここで示した試行は、いかめしいことばを並べたてたわりに、実際の資料をもちいた説明の手並みがずさんであることは否めず、その趣旨も論理といえる代物ではない。たとえば、共存する縄文施文系との密接な関係を予測しつつも、北海道押型文系を論に組みこめなかったなど、実際いくつかの矛盾をかかえている。そして、なぜ「羽状縄文系」なのか、すぐさま答えを用意できるわけではない。このような土器論のは是非をもふくめ、批判・修正をあおぎたい。

本論を発表した当初の考え方では、全体を三編から構成し、前編で羽状縄文系の構成変化、中編で背後に保たれる血脉、後編で文様構成の選択秩序を、全体が反映されるよう解説するつもりであった。本編のうちには、羽状縄文系のなかで、とくに関東のニツ木・関山期の土器を題材として、文様構成の選択法が、ある種の数学的規則性で管理されていたことを指摘するよう備えていた。表題も、もっぱらこれを最終の念頭においたものである。

しかし、前編の公表後に、このことに關し、単純だが、重大な誤認をおかしていることに気づいた。その後、あやまちをなんとか補おうと努力したが、本編の発表にいたるまで整合をえることができず、いまだにそのめどはついていない。

そのため、勝手ではあるが、本編で「羽状縄文系土器の文様構成」は当面の完結とすることしたい。幾編もつづくかのようなまぎらわしい数字を論題の末にそえたうえに、その核心たる部分を欠くはめとなつたことを諸兄におわび申しあげる。

今後、さらに検討をかさね、誤認が解消されたなら、同じ論題の(3)として発表したい。

本論を発表するにあたり、小林達雄・戸田哲也・高橋與右衛門・新東晃一・下村克彦・西幸隆・三宅徹也・宮崎朝雄・鈴木敏昭・渋谷昌彦・橋本勉・宮田栄二・芳賀英一・相原淳一・山形洋一・小倉均・金子直行・細田勝・武藤康弘・新屋雅明・奥野美生の各氏には、多くのご教示やご指導をいただきました。ご芳名をかかげ、感謝申しあげます。

参考文献（著者五十音順）

- 柏原厚一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心として－」『考古学雑誌』第76巻第1号 日本考古学会
- 青木秀雄 1979 「高輪寺遺跡」久喜市教育委員会
- 網谷克彦 1981 「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究(1)」『鳥浜貝塚1980年度調査報告』福井県教育委員会
- 綱野善彦 1982 「東と西の語る日本の歴史」そして
- 新井和之 1979 「鳥浜式土器小考」「日本考古学研究所叢書」II 日本考古学研究所
- 稻川季凡 1972 「縄文式土器文様発達史・素描(上)」「考古学研究」第18卷第4号 考古学研究会
- 井上智博 1991 「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相－中国地方を中心として－」『考古学研究』第38卷第2号 考古学研究会
- 今福利志 1990 「勝坂式土器様式の個性と多様性」『考古学雑誌』第76巻第2号 日本考古学会
- 今村啓爾 1983 「文様の割りつけと文様帶」「縄文文化の研究」第5巻 雄山閣
- 岩瀬邦男 1979 「陸上植物の種」UPバイオロジー33 東京大学出版社
- 「野佳也 1986 「縄文コミュニケーション」モナド・ブックス47 海鳴社
- 遠藤晋澄 1990 「東北地方IV式について」「災厄川流域の遺跡群XIII」北海道埋蔵文化財センター調査報告第62集
- 大沼忠春 1981 「道央部の縄文前期土器群の編年について」「北海道考古学」第17輯 北海道考古学会
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」「北海道考古学」第20輯 北海道考古学会
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年(II)」「北海道考古学」第22輯 北海道考古学会
- 奥野寅生 1989 「黒沢式土器の系統性とその変遷」「土壤考古」第13号 土壤考古学会
- 奥野寅生 1991 「神ノ本式土器研究ノート」「埼玉考古学論集」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小野正文 1983 「縄文時代早期・前期初頭の土器について－駿河遺跡群を中心として－」「研究紀要」1 山梨県立博物館
- 加藤邦雄 1982 「山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター」「縄文文化の研究」第3巻 雄山閣
- 金子直行 1988 「縄文前期土器における人形変形文系土器群の成立と展開」「埼玉考古」第25号 埼玉考古学会
- 川尻信夫 1972 「集合」の話 講談社現代新書 420
- 河瀬正利 1986 「山陰地方の縄文早期・前期土器の様相」「山陰考古学の諸問題」山本清先生晩寿記念刊行会
- 熊谷常正 1983 「岩手県における縄文前期土器群の成立－一条彌文系土器群から羽状彌文土器群へ－」「岩手県立博物館研究報告」第1号
- 小林達雄 1984 「縄文時代領域論」「坂本太郎博士碑記念日本歴史論文集」上巻 吉川弘文館
- 小林達雄編 1988 「縄文土器大観」第2巻 小学館
- 小林達雄編 1988 「縄文土器大観」第3巻 小学館
- 小林達雄編 1989 「縄文土器大観」第1巻 小学館
- 小林達雄編 1989 「縄文土器大観」第4巻 小学館
- 佐藤訓敏 1983 「石川県文化の土器群」「十勝考古」第6号 十勝川流域史研究会
- 佐藤訓敏 1987 「宮本式土器の編年に関する一考察」「苗原2遺跡」音更町教育委員会
- 佐藤訓敏 1987 「北海道縄文早期遺跡地名表」「帯広百年記念館紀要」第5号
- 佐藤典邦 1987 「鶴川式土器終末から黒沢式土器初頭の諸問題(1)」「史峰」第12号 新進考古学同人会
- 佐藤典邦 1988 「開山式土器終末から黒沢式土器初頭の諸問題(2)」「史峰」第13号 新進考古学同人会
- 佐藤典邦 1989 「大木2a式土器研究ノート」「史峰」第14号 新進考古学同人会
- 佐藤典邦 1989 「大木G式以後(1)」「若狭」第8号 いわき考古同人会
- 佐原 真 1985 「分布論」「日本考古学」1 岩波書店
- 潮見 浩 1985 「帝釈遺跡群の織維土器」「論集日本原史」吉川弘文館
- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究－木島式土器の型式網分について－」「静岡県考古学研究」11 静岡県考古学会
- 渋谷昌彦 1983 「神之木台・下古井式土器の研究－その型式内容と編年的位置について－」「小田原考古学会会報」11
- 渋谷昌彦 1984 「花積下層式土器の研究－側面底痕文土器を中心として－」「丘陵」第11号 甲斐丘陵考古学研究会
- 下村克彦 1981 「新田野段階花積下層式土器とニツ木式土器について」「奈和」奈和同人会
- 新東晃一 1982 「塞ノ神式土器」「縄文文化の研究」第3巻 雄山閣

- 鈴木信雄 1989 「縄文 a 式土器研究史(1)ー型式論的研究の基本的問題を探るー」『土曜考古』第13号
上巣考古学会
- 高木貞夫 1978 「動物の分類」UPバイオロジー26 東京大学出版会
- 鷹野光行 1983 「縄文後半期」『北海道考古学』第20輯 北海道考古学会
- 高橋雅賀子 1992 「東北地方縄文時代前期前葉組織縄文について」
『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生退官記念会
- 高橋信武 1989 「縄式土器刊考」『考古学雑誌』第75巻第1号 日本考古学会
- 高橋雄三 1981 「花積下層式土器の研究ー関東・東北南部における縄文前期社会の成立」
『考古学研究』第28巻第1号 考古学研究会
- 田中和之 1990 「縄文時代前期中葉の土器群の問題点～「組合せ縄目状」文土器群の成立と展開を中心として～」
『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 田中英司 1988 「小岩井渡場跡出土の抉入尖頭器」『考古学雑誌』第74巻第2号 日本考古学会
- 田中良之 1981 「阿高式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 谷井 龍 1977 「勝板式土器の文様構造について」『埼玉考古』第16号 埼玉考古学会
- 谷藤保彦 1988 「北関東における有尾式土器の変遷」『考古学叢考』下巻 吉川弘文館
- 高柳泰時 1974 「円筒土器分布図が意味するもの」『北奥古代文化』第6号 北奥古代文化研究会
- 戸田哲也・大矢昌彦 1979 「神之木式・有尾式土器の研究(前)ー茅野市神之木遺跡探集の資料を中心としてー」
『長野県考古学会誌』34
- 鳥羽正之 1991 「縄文時代前期中葉土器群の幅年と地域性」『埼玉考古』第28号 埼玉考古学会
- 南雲治臺 1974 「環境・空間・構成」東京デザイナー学院
- 成川滋彦 1981 「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 西田 茂 1993 「ふたたび東北路II式について」『考古論集』瀬見浩先生退官記念事業会
- 西田正規 1985 「縄文時代の環境」『日本考古学』2 岩波書店
- 橋爪大三郎 1988 「はじめての横造主義」講談社現代新書898
- 林 謙作 1986 「亀ヶ岡と遠賀川」『日本考古学』5 岩波書店
- 藤巻幸男 1992 「群馬県における縄文時代早期末から前期初頭土器群の様相ー縄文系土器を中心にー」
『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤本 強 1988 「もう二つの日本文化」UP考古学選書2 東京大学出版会
- 細田 勝 1989 「黒浜式土器成立の背景についてー特に東北地方土器群との対比を通してー」『古代』第87号
早稲田大学考古学研究会
- 細田 勝 1991 「縄文時代前期中葉の一様相・相互刺突文土器を中心としてー」『埼玉考古学論集』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堀越正行 1988 「水子式土器考」『史館』第二十号 史館同人会
- 増子康真 1982 「木島式土器の検討」『中部高地の考古学』II 長野県考古学会
- 水ノ江和則 1988 「菅原式土器の出現ー東アジアにおける先史時代の交流ー」『古代学研究』第117号
古代学研究会
- 三宅徹也 1982 「円筒土器」『縄文文化の研究』第3巻 雄山閣
- 宮本一夫 1987 「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」
『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度 京都大学埋蔵文化財研究センター
- 宮本一夫 1990 「縄B式土器の再検討—京都大学文学部博物館所蔵資料を中心にー」『肥後考古』第7号
肥後考古学会
- 宮本一夫 1990 「海峽を挟む二つの地域ー山東半島と遠東半島、朝鮮半島南部と西九州、その地域性と伝播の問題
ー」『考古学研究』第37巻第2号 考古学研究会
- 武藤康弘 1988 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究ー表館式、早稻田第6類土器をめぐってー」
『考古学雑誌』第74巻第2号 日本考古学会
- 武藤康弘 1991 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究ー円筒下層a式直前の土器群をめぐってー」
『考古学雑誌』第76巻第3号 日本考古学会
- 村田 全・茂木 勇 1966 「数学の思想」NHKブックス42
- 山内幹夫 1983 「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について 牡丹平2群1類土器を中心としてー」
『しのぶ考古』8

- 山口信義 1987 「佐藤文(轟B式)土器研究ノート」「研究紀要」創刊号
北九州市教育文化事業開拓文化財調査室
- 吉田哲夫 1984 「木島系土器群の研究」「考古学研究」第31卷第3号 考古学研究会

資料の出典(遺跡所在都道府県別の年代順)

(北海道)

- 見玉作左衛門・大場利光 1954 「函館市春日町出土の遺物について」「北方文化研究報告」第9輯 北海道大学
河野広道 沢 四郎 1962 「東剣路」銅路市教育委員会
- 駒井利宏編 1963 「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」上巻 東京大学文学部
八幡一郎編 1966 「北海道根室の先史遺跡」根室市教育委員会
- 篠 考一 1968 「芽室町小林遺跡調査報告」芽室町教育委員会
- 米村哲英他 1968 「網走湖底遺跡」網走市郷土博物館報告2
- 宇田川洋・豊原照司 1976 「剣路川中流域の縄文早期遺跡・金子遺跡」標茶町教育委員会
- 後藤秀彦・大槻日出男 1976 「共栄B遺跡」蒲幌町教育委員会
- 佐藤一夫他 1976 「植苗貝塚」苦小牧市文化財調査報告2 苦小牧市教育委員会
- 北海道教育委員会編 1978 「美沢2遺跡」「美沢川流域の遺跡群II」
- 北海道教育委員会編 1979 「美々5遺跡」「美々7遺跡」「美沢1遺跡」「美沢川流域の遺跡群III」
- 北海道埋蔵文化財センター編 1980 「美沢5遺跡」「フレベッ遺跡群」
- 北海道埋蔵文化財センター編 1981 「美々6遺跡」「美沢3遺跡」「美沢川流域の遺跡群IV」
北海道埋蔵文化財センター調査報告第3集
- 藤本 強 1982 「岐阜第二遺跡」常呂町
- 佐藤訓敏 1983 「虎杖浜3遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告第11集
- 遠藤香澄 1983 「川上B遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告第13集
- 佐藤訓敏 1984 「古舞4遺跡の考古学的調査」慈別町教育委員会
- 北海道埋蔵文化財センター編 1984 「納遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告第15集
- 荒生健志 1985 「ビラオツマッコウマナイチャシ遺跡」美幌町文化財調査報告1 美幌町教育委員会
- 佐藤訓敏 1986 「帶広・宮本遺跡」帯広市文化財調査報告3 帯広市教育委員会
- 西田 茂 1986 「川上B遺跡・C地区」北海道埋蔵文化財センター調査報告第27集
- 野中一宏 1988 「美沢11遺跡」「ベンケイナ川流域の遺跡群II」北海道埋蔵文化財センター調査報告第44集
- 遠藤香澄 1989 「美沢3遺跡」「美沢川流域の遺跡群XII」北海道埋蔵文化財センター調査報告第58集
- 西田 茂 1989 「納内6丁目付近遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告第55集
- 遠藤香澄 1990 「美沢3遺跡」「美沢川流域の遺跡群XIII」北海道埋蔵文化財センター調査報告第62集
- 大沼忠春 1990 「美沢3遺跡」「美々3遺跡」「美沢川流域の遺跡群XIV」
北海道埋蔵文化財センター調査報告第69集
- 工藤翠・渡辺俊一 1990 「静川3遺跡」「苦小牧東部工業地帯の遺跡群III」
苦小牧市教育委員会 苦小牧市埋蔵文化財調査センター
- 西田 茂他 1990 「納内6丁目付近遺跡II」北海道埋蔵文化財センター調査報告第63集
- 荒生健志 1992 「三橋遺跡」美幌町文化財調査報告X 美幌町教育委員会
- 佐藤和雄 1992 「上清水2遺跡・共栄3遺跡(2)・東松沢2遺跡・北明1遺跡」
北海道埋蔵文化財センター調査報告第76集
- (青森)
佐藤達夫・渡辺兼庸 1960 「六ヶ所村表館出土の土器」「上北考古会誌」1
- 鈴木克彦 1978 「熊沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第38集 青森県教育委員会
- 大湯卓二 1980 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第57集 青森県教育委員会
- 工藤泰博 1980 「大平遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 青森県教育委員会
- 坂本洋一 1980 「水野遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第56集 青森県教育委員会
- 成田透彦 1981 「旗架遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第63集 青森県教育委員会
- 三宅徹也 1984 「和野前山遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第82集 青森県教育委員会
- 三浦圭介 1985 「丸場・大タルミ遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第93集 青森県教育委員会
- 三宅徹也 1985 「衣笠遺跡発掘調査報告書II」青森県埋蔵文化財調査報告書第91集 青森県教育委員会

- 成田滋彦 1986 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』 背森原埋蔵文化財調査報告書第101集 青森県教育委員会
- 三浦七介 1988 『上尾駅(1)遺跡△地区』 背森原埋蔵文化財調査報告書第112集 青森県教育委員会
- 工藤 大 1989 『衣笠(1)遺跡試掘調査報告書』 背森原埋蔵文化財調査報告書第121集 青森県教育委員会
- 三浦七介 1989 『免茶沢(1)遺跡IV 表鉢(1)遺跡田』 背森原埋蔵文化財調査報告書第120集
青森県教育委員会
- 坂本洋一 1990 『幸畑(7)遺跡』 背森原埋蔵文化財調査報告書第125集 青森県教育委員会
- 葛山昇性 1992 『宮ノ沢(2)遺跡V』 青森県埋蔵文化財調査報告書第143集 青森県教育委員会
(岩手)
- 高橋與右衛門 1979 『二戸市沢内B遺跡』 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第7集
- 高橋與右衛門 1983 『上里遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第55集
- 高橋與右衛門 1986 『湯舟沢遺跡』 滝沢村文化財調査報告書第2集 滝沢村教育委員会
- 高橋亞賀子 1987 『仏沢III遺跡』 滝沢村文化財調査報告書第5集 滝沢村教育委員会
- 田鍋壽夫 1988 『馬立I・太田遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集
(秋田)
- 小林 克 1982 『上葛岡IV遺跡』 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書V」
秋田県文化財調査報告書第91集 秋田県教育委員会
- 児玉 準 1988 『上ノ山II遺跡』 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II」
秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会
- (宮城)
- 角田文衛 1936 『陸前船入島貝塚の研究』『考古学論叢』第三編 考古学研究会
- 林 練作 1960 『宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群』『考古学雑誌』第46巻3号 日本考古学会
- 金子浩昌 1977 『鬼附遺跡発掘調査報告書・金山貝塚発掘調査報表』 堀川町文化財調査報告
宮城県文化財保護協会
- 伊東信謙 1978 『東山貝塚調査報告』 奈良社
- 佐藤則之 1980 『三神寺遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告第25集 仙台市教育委員会
- 丹羽 茂他 1982 『勝負沢遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書VI』 宮城県文化財調査報告書第83集
宮城県教育委員会
- 加藤道男他 1984 『二原敷遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書IX』 宮城県教育委員会
- 小川 出 1986 『今熊野遺跡II』 宮城県文化財調査報告書第114集 宮城県教育委員会
- 手塚均他 1987 『西林山遺跡』『中ノ内A遺跡・木屋敷遺跡他』 宮城県文化財調査報告書第121集
宮城県教育委員会
- (山形)
- 保角卓志 1973 『山形県大石田町庚中町遺跡の織文土器について』『山形考古』第2巻2号 山形考古学会
- 保角里志 1975 『小林遺跡』 東根市教育委員会 小林遺跡調査団
- 泰昭繁他 1977 『松原』 嶺陽考古学会
- (福島)
- 竹島四基 1975 『宮田貝塚一昭和48年7月発掘調査報告』 小高町教育委員会
- 馬目順一他 1975 『大畠貝塚調査報告』 福島県 いわき市教育委員会
- 芳賀英一 1980 『源平C遺跡』『畠畠地区遺跡発掘調査報告IV』 福島県文化財調査報告書第84集
福島県文化センター 福島県教育委員会
- 馬目順一 1982 『竹之内遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊 いわき市教育委員会
- 鈴鹿良一 1983 『松ヶ平A遺跡(第1次)』『真野ダム開削遺跡発掘調査報告IV』
福島県文化財調査報告書第118集 福島県文化センター 福島県教育委員会
- 安田 徳 1983 『地蔵田B遺跡』『畠畠地区遺跡発掘調査報告II』 福島県文化財調査報告書第115集
福島県文化センター 福島県教育委員会
- 芳賀英一 1984 『舟宮西遺跡』 会津高田町文化財調査報告書第5集 会津高田町教育委員会
- 渡辺一雄・佐藤典邦 1986 『弘源寺貝塚』 いわき市埋蔵文化財調査報告第13冊 いわき市教育委員会
- 鈴鹿良一 1987 『羽白D遺跡(第1次)』『真野ダム開削遺跡発掘調査報告X』
福島県文化財調査報告書第183集 福島県文化センター 福島県教育委員会
- 松本 康 1991 『法正尻遺跡』 福島県文化財調査報告書第243集 福島県文化センター 福島県教育委員会

(茨城)

- 井上義安・大内幹夫 1966 「大中貝塚と出土土器について」『茨城先史学研究』1 茨城県先史時代研究会
井上義安 1967 「那珂渓谷富士ノ上遺跡」『那珂川の先史遺跡』第1集 那珂川の先史遺跡刊行会
桜井二郎 1981 「大生郷遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告書XII
鈴木素行 1985 「原町西貝塚発掘調査報告書」古河市史資料第9集 原町西貝塚調査委 古河市史編さん委員会
吹野高美夫 1986 「大串貝塚」常陸村埋蔵文化財調査報告第2集 常陸村教育委員会
久野俊虎 1987 「境松遺跡」茨城県教育財團文化財調査報告第41集

(栃木)

- 岡本勇・塙田光 1962 「栃木県・那珂貝塚の調査」『考古学集刊』第4冊 東京考古学会
(群馬)

- 若月省吾 1980 「笠懸村福荷山遺跡」笠懸村教育委員会
富沢敏弘 1985 「中棚遺跡・長井坂城跡」昭和村教育委員会 群馬県教育委員会
島羽政之 1985 「見立瀬井遺跡」赤城村教育委員会 群馬県教育委員会
柿沼恵介 1986 「分郷八崎遺跡」北橘村教育委員会 群馬県教育委員会
菊池 実 1986 「三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団
関根慎二 1986 「糸井宮前II」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団
間庭 稔 1986 「善上道路・三峰神社裏・大友館跡道路」夜野町教育委員会 群馬県教育委員会
谷藤保彦 1987 「三原田城遺跡・八崎城址・八崎塚・上青梨子古墳」
群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(埼玉)

- 三友国五郎他 1958 「大谷場貝塚 一ツ木遺跡」南浦和地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 淀和市文化財調査委員会
大宮市編 1968 「下手遺跡」「堀畠島遺跡」「大宮市史」第一巻
庄野靖寿 1974 「闇山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集 埼玉県教育委員会
増田正博 1974 「上尾市後山遺跡」上尾市教育委員会
荒井幹夫他 1978 「打越遺跡」富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
梅沢太久夫 1978 「八幡遺跡」都幾川村教育委員会
比野靖寿・下村克彦 1978 「貞観貝塚第三次発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第12集 大宮市教育委員会
並木 隆 1978 「甘柏原・ゴシン・露梨子遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第35集
青木秀雄 1979 「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会
会田 明 1980 「宮廻遺跡」富士見市遺跡調査会調査報告第10集
小倉均他 1980 「大間木谷・和山西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第13集
谷井 勉 1980 「舟山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集 埼玉県教育委員会
黒坂慎二 1981 「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第19集
新井和之 1982 「川崎遺跡第4次」「埋蔵文化財の調査(IV)」鉢土資料第28集 上福岡市教育委員会
荒井幹夫 1982 「早期未業から前期初頭にかかる隆蒂文・沈線文土器群の実態とその編年」
「研究紀要」2 富士見市遺跡調査会
山形洋一 1982 「宮ヶ谷塔第5貝塚」大宮市遺跡調査会報告第5集
市川 修 1983 「深屋・北塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
小倉 均 1983 「井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第32集
板戸市編 1983 「城西大学大学所有の発掘資料 多和目遺跡」「板戸市史」原始資料編
佐々木保俊他 1983 「打越遺跡」富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
黒坂慎二 1984 「深作東部遺跡群」大宮市遺跡調査会報告第10集
庄野靖寿 1984 「尾ヶ崎遺跡」埼玉県庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
豊間孝志 1984 「三カ尻林(2・台)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第34集
大庭季司 1985 「天神前遺跡」蓮田市文化財調査報告第7集 蓼田市教育委員会
黒坂慎二 1985 「宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第18集 大宮市教育委員会
佐々木保俊・森田安彦 1985 「貝塚山遺跡発掘調査報告書-第3地点-」富士見市遺跡調査会報告第25集
山形洋一 1985 「宮ヶ谷塔貝塚」大宮市遺跡調査会報告第13集
小倉 均 1986 「馬場小空山遺跡(第12次)・井沼方遺跡(第9次)」

- 浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第6集 浦和市教育委員会
- 山形洋一 1986 「染谷遺跡群発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第20集 大宮市教育委員会
- 奥野茂生他 1987 「黒浜貝塚群 山上貝塚・御林遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第16集 埼玉県教育委員会
- 金子直行 1989 「下段遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第87集
- 細田 勝 1989 「中山谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集
- 宮井英一 1989 「古井戸—绳文時代—」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 中村誠二 1991 「大古里遺跡(第9・10・11・12地点) 稲荷原遺跡」
浦和市内遺跡発掘調査報告書第15集 浦和市教育委員会
- 和田晋治 1991 「打越遺跡第18地点」富士見市遺跡群IX 富士見市文化財報告第41集 富士見市教育委員会
- 中村誠二 1992 「大古里遺跡・白蛇古墳遺跡・本塚遺跡・白蛇遺跡」
浦和市内遺跡発掘調査報告書第17集 浦和市教育委員会
- 細田 勝・黒坂慎二 1992 「上福岡貝塚資料—山内清男考古資料3」奈良国立文化財研究所史料第33冊
- 山形洋一 1992 「御藏山中遺跡II」大宮市遺跡調査会報告第33集
- 和田晋治 1992 「宮前遺跡第13・15地点」富士見市遺跡群X 富士見市文化財報告第42集
富士見市教育委員会
- (千葉)
- 西村正衛 1957 「千葉県香取郡房貝塚出土土器」「学術研究」第六号 早稻田大学教育学部
- 加藤晋平・横口定志 1974 「千葉県勝浦市における発掘調査(1)…長者ヶ台高架遺跡」
『考古学ジャーナル』98 ニューサイエンス社
- 武井則道他 1974 「新田野貝塚」立教大学考古学研究会
- 吉内 茂 1974 「柏市西ノ裏遺跡」千葉県都市公社
- 清藤一順他 1975 「飯山湖東遺跡」房総考古資料刊行会
- 八幡一郎他 1975 「幸田貝塚第5次(昭和50年度)調査概報」松戸市文化財小報8 松戸市教育委員会
- 吉内 茂 1976 「船尾白壁遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書V」千葉県文化財センター
- 大塚広往他 1979 「幸田貝塚第8次(昭和53年度)調査概報」松戸市文化財小報13 松戸市教育委員会
- 寺島和秀 1981 「山ノ田台遺跡」柏市教育委員会
- 宮 重行他 1981 「木の根」千葉県文化財センター
- 石井 雄他 1982 「下根遺跡」館町教育委員会
- 田中 豪 1984 「花前1遺跡」「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II」千葉県文化財センター
- 花輪 宏 1984 「中国分三丁目四六三番地一所在遺跡」「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告」
市川市教育委員会
- 大塚広往 1986 「幸田貝塚(第11次調査)・東半賀貝塚(第4次調査)」松戸市文化財調査報告第12集
松戸市教育委員会
- 原田昌幸 1986 「若葉台遺跡」「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V」千葉県文化財センター
(東京)
- 森 常彦他 1982 「多聞寺前遺跡I」「多聞寺前遺跡調査会
- 新井真博 1984 「N-278遺跡」「多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度—」(第1分冊)
東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集
- 小木昌樹
(神奈川) 1988 「御嶽前遺跡」北区埋蔵文化財調査報告第4集 北区教育委員会
- 坂上克弘 1972 「荏田10遺跡」「港北ニュータウン地城内文化財調査報告III」横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 高橋雄三・吉田哲夫 1977 「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」「調査研究集録」第2冊
港北ニュータウン埋蔵文化財調査用
- 東原信行他 1979 「黒川東遺跡」高津園省耕友の会郷土誌研究部
- 桑山龍造 1980 「菊名貝塚の研究」菊名貝塚研究会
(山梨)
- 小野正文 1986 「积迦堂I」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集 山梨県教育委員会
(長野)
- 神村 透他 1972 「尾越遺跡」「中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町その1—」
長野県教育委員会

- 樋口昇一他 1976 「十二ノ戸遺跡」『中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一原村市その4-1』
長野県教育委員会
- 金井正三 1982 「繩文前期有尾式土器の再検討」『信濃』第34巻4号 信濃史学会
- 百瀬新治 1982 「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一原村その5-1』
長野県教育委員会
- 児玉卓文 1983 「長門町六反田」長門町教育委員会
- 児玉卓文 1984 「長門町中道」長門町教育委員会
- 小林正春 1986 「恒川遺跡群」飯田市教育委員会
- 守矢昌文 1986 「高風呂遺跡」茅野市教育委員会
- 島田恵子 1987 「後平遺跡」佐久町文化財調査報告書第3集 佐久町教育委員会
- 小池孝 1990 「中越遺跡発掘調査報告書」宮田村教育委員会
- 鶴岡幸雄 1990 「棚畠」茅野市教育委員会
(新潟)
- 中村孝三郎 1964 「宝谷洞窟」長岡市立科学博物館考古研究室調査報告書第6冊
- 小野昭・小熊博史 1987 「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究』III巻町
(富山)
- 森秀典 1985 「野沢狐塚遺跡発掘調査概報」立山町教育委員会
- 山本正俊 1986 「七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 南太閤山I遺跡」富山県教育委員会
(石川)
- 津田解吉 1983 「半の浦遺跡」「青田野寺遺跡」七尾鹿島広域圏事務組合
(福井)
- 刺谷克彦 1979 「鳥浜貝塚--繩文前期を主とする低湿地遺跡の調査1-1」福井県教育委員会
(愛知)
- 中山英司 1955 「入海貝塚」東浦町教育委員会
- 山下勝年・杉崎章 1976 「清水ノ上貝塚」南知多町文化財調査報告第1集 南知多町教育委員会
- 奥川弘成 1986 「吹田貝塚の吹烟式土器」「知多古文化研究」2 知多古文化研究会
(滋賀)
- 泉拓良 1984 「栗津貝塚湖底遺跡」滋賀県教育委員会
(京都)
- 梅原末治 1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」「京都府史講名勝天然記念物調査報告」第十六冊
京都府
(大阪)
- 藤永正明 1987 「淡輪遺跡発掘調査概要報告書Ⅷ」大阪府教育委員会
(岡山)
- 問壁忠彦・問壁貞子 1971 「里木貝塚」「倉敷考古館研究集報」第七号
(広島)
- 中越利夫 1985 「帝釈峠遺跡群出土の繩文前期土器の研究(1)」「帝釈峠遺跡群発掘調査空年報」Ⅷ 広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室
(鳥取)
- 鬼井縣人・田中弘道他 1983 「島遺跡発掘調査報告書第1集」北条町埋蔵文化財報告書2 北条町教育委員会
(鳥取)
- 内田律雄 1987 「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ」島根県教育委員会
(福岡)
- 馬田弘稔 1976 「柏原野田遺跡」柏原野田遺跡調査団
- 小池史哲 1977 「春日市柏田遺跡の調査」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集」福岡県教育委員会
- 高永直樹 1981 「野口遺跡」「久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告」
久留米市文化財調査報告書第28集 久留米市教育委員会
- 山崎純男 1983 「柏原遺跡群Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集 福岡市教育委員会
- 佐藤浩司 1985 「下吉田遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告第39集 北九州市教育文化事業団

(大分)	
後藤一重 (熊本)	1986 「下哲生B遺跡」『哲生台地と周辺の遺跡IX』竹田市教育委員会
西出道世 (宮崎)	1978 「阿高貝塚」熊本市教育委員会
面高哲郎 永友良典 (鹿児島)	1985 「下田畠遺跡 小山尻東遺跡 赤坂遺跡 小山尻西遺跡」 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集 宮崎県教育委員会
青崎和憲 川崎勝洋 斎宋久志 井ノ上秀文 前追亮一	1991 「埋蔵文化財調査研究報告IV 下弓田遺跡一資料編一」宮崎県総合博物館
	1978 「阿多貝塚」金峰町埋蔵文化財調査報告書(1) 金峰町教育委員会
	1979 「三代寺遺跡 木佐賀原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 鹿児島県教育委員会
	1981 「加治屋町遺跡 木の迫遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 鹿児島県教育委員会
	1981 「中尾田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 鹿児島県教育委員会
	1987 「桜木原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44) 鹿児島県教育委員会

研究紀要 第10号

1993

平成5年12月20日 印刷

平成5年12月25日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社